

LA REVUO ORIENTA

Esperanto-Revuo "La Revuo Orienta"

MONATA ORGANO DE JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

第九年

第六號

目次 (ENHAVO)

正維持員新設に際し.....	161
TRA ESPERANTUJO	
海外消息及内地報道.....	162
アカシアの花.....栗飯原晋	169
POR LERNANTOJ	
Esperanto初級講座.....松本清彦	170
クオ・ヴァイス.....	172
質疑應答.....小坂狷二	174
他山の石.....小坂狷二	176
和文Esperanto添削欄.....編輯部	178
萬國大會の活況.....小坂狷二	180
綠蔭綠話.....川崎直一	182
つみな集.....小坂狷二	183
新刊紹介.....堀真道	184
LITERATURO	
眞直に目的へ〔萩原井泉水原作Esperanto譯〕.....佐々城松榮	185
人間椅子〔江戸川亂歩原作Esperanto譯〕.....弓山重雄	186
DIVERSAJ	
會員の聲.....	190
財團法人日本Esperanto學會寄附行為内規並維持員會々則.....	191

新小川町三ノ吉
東京市牛込區
財團法人日本Esperanto學會發行

JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

TOKIO, Utsunomiya-ku,
Shin-Okubo-machi III-14.

[Jara abono internacia 7 svisaj frankoj]

JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO • 1928

編輯後記

★大會の Protokolo を本月號附録にだす筈でしたが大阪エス會の都合で七月號にのせる事になりました。あしからず。

★從來の學會支部といふものは合法的のものではなかつたのでこれをすつかり組織をかへて學會維持員會支部といふ形式のもゝに眞の學會支部といふものをつくりあげる事になりました。各地同志の御努力をのぞみます。尙從來の學會支部は少くとも六月限で解散の上至急新しき組織による再生をのぞむものです。(新規則は本誌卷末にあります)

★學會寄附行爲の内規も新しくできました。これも本誌卷末にありますから御覽下さい。

★ふるつて年額三圓の正維持員におなり下さいまして皆様の會なる本學會の發展を御援助下さい。本月より正維持員におかはり下さる方々は會費不足額として本月より會費前金切の月迄毎月五錢の割で御拂込下さい。

編輯部

外國圖書雜誌取次部より

★昨冬御注文をうけた U. E. A. の Esperanto 誌はまだ御手許へさゞかぬそうで先方へかけあつてゐます。その中にさゞくさ存じます。きく所によると U. E. A. は新入會員の登録の手續が極めておそいさの事ですからまだおくれてゐる事と思ひます。暫くおまち下さい。Heroldo de Esp.の方は御手許へさゞいてゐる筈です。もしさゞかない方があれば御申出な。

★Bulteno de Internacia Scienca Asocio Esp. の本年度第二號(N-ro 10)は最近お手許へついた筈、もし着かない方は御紹介な。

再生の學會會話會

前月號豫告の通り再生した會話會は去る 19 日第一回を丸之内鐵道クラブで催しました。今度はやり方をかへたので約五十名の方々が出席されたことは喜びに堪えません。別項記載の様に始め望月博士の「美術にあらはれた解剖」の日本語の講話の後五六名乃至七八名一團となつて卓をかこみ各 grupoj に一人二人の指導者を置して話圓滑と話題の轉換を期したやり方が非常によかつたので參會者多數の共響と満足をかり得ました。今後益々盛大におもむく事と存じます。本月は次の如き期日におこないます。前回御出席の方は勿論の事新しい方々も奮つて御出席下さい。御出席の方々で何か興味のふかい物品や材料がありましたら御持參下さいますれば一層好話題を提供することゝなろうと存じます。

第二回會話會——期日——催し物

1. 會場——東京市麴町區丸ノ内鐵道クラブ(東京驛西北……永樂町市電停留所傍日活本社の横手を入り丸之内ホテルの裏側にある二階建の建物)
2. 催し——始め三十分間東朝紙部長土岐善麿氏の「漢詩の和譯について」(日本語にて)の講話あり。後會話練習。
3. 會費——無料(場合によつて茶代として五錢頂くかもしれません。)

學會主催 エスペラント常設講習

(初等科規則變更)

★初等科(二ヶ月を一期間とし4月6月8月10月12月2月を新學期とす)

會場——東京市四谷區旭町4 二葉保育園

期日——第一月は毎週月、木兩日 午後7-8.30

第二月は毎週木曜一回 同時刻

會費——第一月は1圓。第二月は50錢。

教科書——エスペラント・ラヂオ・テキスト

★中等科(隨時入會聽講可)

會場——東京市牛込區新小川町 日本エス學會

期日——毎週金曜日 午後7-9時

會費——一ヶ月50錢(15日以後入會は半額)

教科書——Z博士譯 Andersen の Fabelo II.

正維持員新設に際し

新制度を支持し學會の財政基礎を確立せよ。

去る四月大阪に於ける日本エスペラント大會を機とし我學會維持員總會開催され席上學會多年の懸案たりし學會維持員會々則並に支部規程に關し審議決定を行ふと共に我財團内規の一部變更を敢行せらるゝに至り、越へて去る五月十七日開かれた我財團の理事及評議員の合同協議會は前記維持員總會決定の諸項目に關し慎重審議の結果満場一致之を認めたる。即ち別頁に掲ぐるもの之である。維持員會々則、支部規程は何れも從來學會の行ひ來つたものを此際成文化したものに外ならない。然しこの成文化により學會の存在が維持員諸氏との不可分の關係に置かれてゐることを愈々明かにされた。次に財團寄附行為内規の一部變更、即ち從來の普通、賛助、特別、終身維持員の四種に加ふるに正維持員を新設したことは注目すべき點である。

我學會はその活動の基礎を維持員（維持員とは法規上の呼び名で實質は會員を指す）の上に置く。學會の凡ゆる方面の活動に要する財源が一つに維持員の負擔にかゝつてゐる。現在の學會維持員總數は約二千二百名であるが、その九割五分までは普通維持員である。顧みるに現状に於ける學會の財政的餘裕は少しもない。維持員諸氏よりの年額二圓四十錢の會費が如何に尊いかは之を取扱つてゐる學會の態度によつて分るであらう。我國エスペラント運動に於ける我學會の任務は極めて大である。各地に在つて絶へざる種蒔きに身を捧げてゐる維持員諸氏の努力は今日の而して明日に對する學會の基礎を作り上げられたのである。この勞に酬ゆるに維持員會費を低減することこそ本來必要であり之を高額にする事は學會の本來の心持ではない。年額三圓制度を設けることは一見疑問なきを得ないかも知れない。然しながら學會がエスペラントの徹底的普及、實用化、研究に精進するには財政的に見て學會は事務員一人を備ふ餘裕がない現状である。有志者の勞力奉仕により一切の事業が處理せられて行くのが現状である。學會に

課せられた任務は大、進むべき道は遠い、然し財政の餘裕は乏しい。會費三圓の聲が各地多數維持員諸氏より熱烈に叫ばれた理由は此處にある。前月號にも記述された如く普通維持員會費二圓四十錢は學會の經常費として殆んど全部費され従つて新規活動事業は目論み得られない事情にある。機關雜誌の毎月發行、照會問合せ等に對する回示、圖書出版、エス語講習會の開催、諸請願運動等學會の内外は實に多端さふ云べきであるが然しその限られたる乏しい費用によつて之等を擧げて實行することは可成りの困難を伴ふ。こゝに於て會費三圓の正維持員を設置した次第である。

吾人はエスペラント運動に對する維持員諸氏の熱烈なる支持を希つて止まない。從來の普通維持員より正維持員に改められることにより我學會の財政的餘裕が生じ、それだけ我國に於けるエス語運動のヨリ大なる普及發展を確保し得られることを想ふ時に、吾人は聲を大にして全維持員諸氏に訴へずにはゐられない。學會の畢竟の目的は學會の存在を失はしむるにあるかも知れない。エス語が教育に、文藝に、交通に、宗教に其他凡ゆる部門に浸潤し盡した時こそ學會はそれ自體の目的を失ふにあるからである。不幸にして吾人はこの時代の未だ理想の域に屬してゐることを悲しまなければならぬ。然しこの時代の招來はエスペランチストの熱意如何に置かれてゐることは勿論である。吾人は今日の運動をして一步一步有利ならしめなければならぬ。それには團結の力、協力の精神に加ふるに財政的基礎が必須條件である。今日の學會には團結の力、協力の精神は隨所に漲つてゐる。然し財政的基礎は未だ微々たるものがある。維持員諸氏が學會の現在を充分に御諒察の後我等の綠化運動の徹底化を期する爲めに今回新しく規約により設けられたる正維持員に即時御賛成の上御加入あられんことを切望する次第である。

海外報道

學校に於けるエス語

近來エス語の益々實用化されて來た奧太利の首府ウキーン市に於ては同市々會の決定により同市小學校に 24 の新講習會（本誌前號 21 とあつたのは誤り）を始めた事は既記の通りであるが、同國の Ströbersdorf の師範學校に於ても隨意科目としてエス語が編入される事になつた。

佛蘭西に於ても巴里市立の外國貿易學校では隨意科としてエス語が教授されて居たが今回始めて試験を行ひ檢定證書を與へる事になつた。

ラムステッド公使の母國芬蘭の當局は毎年エスペラントの爲に補助金を下附して居るが最近同國首府ヘルシンキに於ける師範學校の三級にエスペラントを編入する事になり、師範科の生徒が試みに第一回のエス語教授をする事になつた。これは参加する者に對しては必修科目の一とする云ふ。

伊太利に於ても Brescia のファシスト教育學院にエスペラントが教科目の一として編入された。和蘭に於てもヘーグ市の Schoevers 商業學校の教科目中にエスペラントが編入された。（I. E. S. 報道に依る）

各地案内記の發行

獨逸のステッティン及びドレスデン兩市、和蘭のドルドレヒト市の旅行局はエスペラントで書いた案内用冊子を發行し、奧太利の商業交通省は折疊式案内記を全部エスペラントで編纂し各地に頒布した。又、ニュールンベルグ市に於ても今年は同市が生み出した世界的畫家アルブレヒト・ドューラーの四百年祭を盛大に祝ふ爲色々の催物を計畫して居るが、同市の運輸局はエスペラントを利用して國外と連絡を計つて居る。同市のエスペランチストは本年アントウェルペンで第二十回世界エスペラント大會が開かれるに際し、同市に Post Kongreso を開き大會参加者が多數訪問されんことを望んで居る。（I. E. S. 報道による）

憲兵にもエス語教授

奧太利の維納市、リンツ市の警官でエスペラントの出来る者に特別の胸章を佩用せしめて居る事は已に報道した所であるが、今般チエツクの首府ブラハ市及び露西亞のレニングラッド市に於ても憲兵の爲に新しくエスペラント講習が開始された。（I. E. S. 報道）

官製葉書にエス語印刷

露西亞に於てはエス語に關する記念切手を始め數種のエス語文字入りの郵便切手や葉書を發行して居るが、今度新しくソビエツト通信部の發行したタタール語及びヂュルヂア語の郵便葉書にもエス語が併用されて居る。

（I. E. S. 報道）

國際エスペラント博物館

エスペラントの國家試験委員を作り、鐵道従業員や大都市の警官にはエス語の胸章を佩用せしめ、小學校、師範學校等にエス語の講習を設ける等、奧太利の當局者は吾々の運動に少なからぬ援助を與へて居る。今般發表された國際エスペラント博物館（Internacia Esperanto-Muzeo）もその一つである。この博物館の目的とする所は、エスペラント運動や各種國際語運動に關する歴史的文献を集め又各國に於けるエス語の普及状態を示す各種資料を蒐集保管するにあつて、同國政府の保護と援助を受け、現在の事務所は商務省内に置かれてある。正式の開館は來年七月維納市に萬國エスペラント大會の antaŭkongreso が開催さるゝに際して行ふ豫定であるが、已に本年四月から實際の仕事始める段取になり、本年のアントウェルペンの大會に吾々の oficiala organo として承認すべきや否や問題になるであらうと思はれる。

國際名譽委員なるものゝ顔ぶれには大臣や宮中顧問官等の傑い名前があり、又エスペランチストとしても、Leono Zamenhof や Th. Cart 教授や Sebert 將軍等の名が綺羅星の如く列つて居るが、實際の仕事は發案者である維納の同志、奧太利エスペラント代表者團の會頭 Hugo Steiner 氏がこれに當るらしい。

已に相當貴重な資料が集められてゐる相であるが、尙各國別に分類して見るゝつまらない資料すらもなほ缺けて居る物が多いので、各國同志より凡ゆる種類の Esperantaĵo を惠送されんことを望んで居る。各資料に寄贈者の名を刻し、そのリストを公開する。尙、會員として物質的に援助されんことを有志の方は會員となつて少くとも年額 1 スイスフラン（約 40 錢）の會費を下記宛送られし事を望んで居る。

Internacia Esperanto Muzeo,
Wien, I., Liebiggasse 5, Aŭstrujo.

歐洲のエス語放送週報

十九世紀後半から二十世紀の始にかけて凡ての民衆が人類の文化に積極的な貢献をなし得べき道が二つ拓かれた。一はラヂオの發明であり、他はエスペ란トの發案である。技術的に限定せられて居た人類の耳や口の能力範圍を擴大したのがラヂオであり、その耳や口に一つの魂を吹き込んで有無相通ぜしめたのがエスペ란トである。その兩者は互に依存して發展し人類は自然の障害を一步一步克服して行くのである。

下記のラヂオ時間表は最近 I. C. K. ラヂオ統計掛の苦心蒐集配列したもので、歐洲各地からのエスペ란ト放送を時間表にしたものである。惜むらくは英、米、亞細亞等は正確な報道を得て居ない爲省略してある。歐洲は狭い大陸に各種の言語が横行して居る爲に實際上の不便不都合が數限りなく、日常の様に起る。従つて實際の必要からかくの如く盛んにエスペ란ト講座や講演が放送されるのである。日本は歐洲各國とその國柄を異にして居て、日常言語の不便を感じる事は彼地の如くではない。しかも一層深刻に一層早急にエスペ란トが必要とされて居るのだ。一體人類文化の建設者たらんと意氣込んで居る日本の民衆からその力を奪ひ去つものは何であつたらうか。外國語學習の困難とその爲の浪費ではなかつたであらうか。高等教育を受ける餘裕のあるものはしばらく置き、大多數の民衆はこの困難の爲に多大の力を奪ひ去られてゐるのである。この奪はれた力を我々に返せ我々自らをして人類文化の建設に參與せしめよ、と云ふ深刻な叫び聲は先づ日本から起らなければならない筈なのである。

ラヂオの全國鑛石化は教育民衆化の數歩前進である。この時に當つて日本各地の放送局がエス語講座を英佛語講座等と同列に扱はないで教育の民衆化としてのエス語の本質を自覺して欲しい。その参考の一端として次表が利用せられれば幸である。この表の時間は中歐の時間である。これに8時間を加へた數が日本の時間になる。各放送所の波長は省略する。

【日 曜 日】

時 分	
8.00	モスコー〔露〕 (エス語講習或は時報、一時間)
18.45	ケーニッヒスベルヒ〔獨〕 (エス語講習)

時 分	
18.45	ダンツィツヒ (エス語講習)
22.00	レニングラード〔露〕
【月 曜 日】	
17.30	キエフ〔露〕
18.30	カウナス〔リトヴィア〕 (エス語講演、20分間)
18.50	カウナス〔リトヴィア〕 (一週間のプログラマーモ放送、10分間)
21.40	ゲフレ〔瑞典〕 (エス語講習)
22.30	モスコー〔露〕 (エス語講演)
23.15	ブラッセル〔白耳義〕 (一週間のプログラマーモ放送、5分間)
23.30	ミンスク〔露〕 (エス語時報、30分間)
【火 曜 日】	
19.10	Huizen (エス語講習、30分間)
20.30	リール〔佛〕 (エス語講習、20分間)
20.40	ミンスク〔露〕 (エス語時報、40分間)
21.40	フアルン〔瑞典〕 (エス語中等講座)
22.00	リヨン〔佛〕 (エス語講座、30分間)
22.00	レニングラード〔露〕
【水 曜 日】	
17.10	ハルコフ〔ウクライナ〕 (エス語講座、30分間)
20.00	オデッサ〔ウクライナ〕 (エス語講座及時報)
【木 曜 日】	
18.45	ウキーン〔埃〕 (エス語講演、10分間)
20.00	タリン〔エストニア〕 (同國の文化、經濟生活の放送)
20.15	ジュネーヴ〔瑞西〕 (エス語講演及講習)
21.00	パリー〔佛〕 (エス語初等及中等講習、30分間)
21.15	パリー〔佛〕 (エス語講演、5分間)
【金 曜 日】	
16.00	ノボシビルスク〔露〕 (交互にエス語講習或は講演)
17.10	ハルコフ〔ウクライナ〕 (エス語講座、30分間)
19.15	スツットガルト；フライブルグ〔獨〕 (隔週エス語講座、30分間)
19.45	スツットガルト；フライブルグ〔獨〕 (次週のプログラマーモ放送、10分間)
19.50	チューリッヒ〔瑞西〕 (同國の産業及運輸に就いて、同國の人類愛文學に就いて、隔週。エス語文學に就いて、一月一回)
20.00	ザグレブ・アグラム〔ユーゴスラヴ〕 (エス語講座)〔以下184頁へ續く〕

内 地 報 道

三高エス會校友會へ入る

足掛け十年の長い間連綿として繼續し幾多優秀なエスペランチストをはぐくんだ三高エスペラント會は學校内に於ても隱然一大勢力をもつてゐたが之を校友會の一部として入會せしむる事に關し三高エス會では大いに各方面の意向をきき八木、近藤、矢戸、内藤の諸先輩の助言を得て校友會入會願を提出した。かくて去る5月11日の校友會委員會にて學生桑原氏が會を代表して入會願出の趣旨を説明し自由討論に入り一時は英語部との合併説もでたが遂に「エス會は現在校友會の他の各部に比して何等遜色なく實に堂々たるものであるから部として認めて何等差支へない」といふ意見を述べる人が多く採決の結果大多數を以てエス會を校友會の一部と認める事となつた。エス會が校友會の一部となつた例は今迄にもきいたが何時の間にかなくなつたのが多いが三高エス會は會そのものゝ實力が充實した結果できあがつたもの故今後も廢止の如き運命をみる事なく堂々と發展するものと思ふ。又高校エス會で校友會へ入つたものとしては全く最初のものである。全國各高等學校のエス會がその校友會へ入る事はのぞましい事である。因みに同部が本年度にもらつた豫算は金30圓である。尙校友會の一部としての役員その他は別項記載の通りである。

花王石鹼とエス文包紙

今回花王石鹼の發賣元たる長瀬商店ではエス語の重要性をみこめ花王石鹼の包紙にエス文を使用する事にした。エス文は西成甫博士の譯筆になるもので相當の分量のものであ

る由。花王石鹼は日に何千何萬箱といふ澤山の分量が賣れるもの故その包紙もそれ相當分量にのぼるもの故これは實にエス文の廣告的チャンピオンとして頒布部數の大きさに於ておそらく日本第一と思はれる。又エス語宣傳上からみても大きな成功と云はなければならない。これの實現には渡邊明氏の努力が大いに與つて力あるこの事である。尙萬朝報エス語欄設置も同氏の御盡力によるこの事、に於いて深く謝意を表す。

學會京都支部

新しい財團法人日本エス學會維持員會々則による維持員會京都支部が生れた、新會則による最初のものであらう。支部代表者は中原修司氏。委員は中野忠一郎、八木日出雄、矢戸圭一、桑原利秀、南順造の五氏なりと。詳報は後に。

HERMESA RONDETO

藥學關係者同人五氏によつて我エス界に世界的とも云ふべき藥學化學方面の *teknikaj vortoj* の蒐集に努力してゐる上記 *Hermesa Rondeto* では最近その編纂中の *Leksikono de Kemio kaj Farmacio* の第三分冊として「日本藥局方による藥劑のエスペラント名」(33頁)及第四分冊として「植物學的分類による生藥名」(18頁)を發表した。右兩分冊は合本製本 (*broŝure*) の上希望者へ金50錢にて頒つ由。醫學藥學及化學植物學方面の同志の批判と協力をまつ。因みに既刊の第一分冊(化學エス術語集)、第二分冊(エス語による無機化學命名法)合本殘部ありと。東京市外澁谷町大山 23 波多野正信氏宛申込の事。

東京

東京エスペラント俱樂部は5月8日 18時より最近ジエネバより御歸朝の櫻井安右衛門氏外、本年4月東大御卒業の學會評議員守隨一氏、同じく本年4月東大へ御入學の城戸崎益敏、江上武夫、伊藤巳西三の諸氏を迎へて、歡迎送別の宴を本郷文化アパートメントに催した。中村理事長を始め會する者卅餘名、司會者粟飯原晋氏開會を宣し晚餐終つて後先づ櫻井氏起つて、國際労働會議に於ける用語問題の紛糾を述べられ、之に次いで城戸崎、江上、伊藤の諸氏夫々出身高校及びその地方に於けるエス語運動の動靜を

話された。最後に守隨、小坂兩氏は共に流暢なエス語で挨拶感想を述べられ、22時盛會裡に閉會。尙當日 *gastoj* として出席さる、筈であつた谷口恒二氏始め、中村喜久夫氏、平岡昇氏等が御都合で缺席されたのは眞に残念であつた。★エスクラビーダ クループ消息 1月20日以來毎週金曜日 16時より17時まで赤門前の喫茶店ハイジンの二階で輪講。會するもの常に15名乃至20名。講本は西教授譯の“*La turo de Londono*”。3月9日に終る。譯者西教授の熱心なる指導がこの輪講をして一段と有意義ならしめた。このハイジンの主

人は色々同志に好意を示してくれた。今度その支店(同じく赤門前)の入口に“Refresigejo; Verda Koko”なる文字を掲げた。近々、alumetoのpaperoにも緑の鶏の繪と“Refresigejo; Verda Koko”の文字を入れる筈。★4月25日より5月5日まで晝休みの時間を利用して初等講習。聴講者30名餘。毎火曜に Rabistoj の輪講。10 數名出席。

Somera Verda Hejmo. 本年も例年の如く催します。

場所:——箱根塔之澤の阿彌陀寺。

時日:——7月10日より1週間乃至10日間。

費用:——1日1圓20錢。毛布又は敷布持参され度し。

“Oratora Kunveno” de medicina studentaro en Tokio kaj ĝiaj najbaraj urboj. 6月16日(土曜)15時より帝大解剖講堂にて。(以上御照會はすべて東京帝大解剖學教室內 浦良治氏に)。★東高エスペラント會の第二回講習會は4月25日より開催。初等科30名 講師丘、高橋兩氏、中等科20名 講師江上氏 25日は會長宮田教官のZ博士とエス語、丘氏のエス語の効用、高橋氏の文法大略等あり。春芽と共に延びんとする同校エス會の希望に満てる新生命の展開は興味ある事であらう。(東高エス會報) ★大森の帝國女子醫專ではエス語講習の爲めに教室を使用する事につき當局の許可を得、1月14日同校講師西、鈴木(正)、浦3氏の出席を得て本科2年及び1年の學生無慮150名はミネルバロンドを創設し會則及役員を決定。2月1日から毎週水木兩日12時半から13時まで初等講習を行つた。本學期に入り毎火曜17時より30分ロンドン塔の輪講、金曜日は同じくパジエートの輪講を開始して、クラサイパーロイを越えて各自自由にごちらかに出席し得る様にした。又5月7日から毎週月木兩日に17時から30分宛の初等講習を初め新本科一年生の綠化につとめる豫定である。(浦氏報) ★既報の如く5月19日19時より丸ノ内鐵道クラブにて會話練習會を開催。會する者約50名。先づ望月周三郎博士の Anatomio por artistoj なる有益且興味ある講演を聴講。これが終つて、小坂狷二氏の lerta aranĝadoにより室内に各數名餘よりなる十數個の grupetoj を作り、その各々に夫々 gvidanto を配置し、適當の temo を選んで、にぎやかな會話會が始まる。其間小坂氏、アレキサンダー嬢、鈴木氏、清水氏等の Spritaj paroladetoj を交へ、21時半豫想外の成功をおさめて閉會。尙本月第三土曜(16日)には熱心

な同志土岐善麿氏を煩し“漢詩和譯の話”なる講話をお願いすることゝなつた。一層多數の御出席を乞ふ。★慶應醫學部エス會では4月20日に校内講堂で例年の通り普及講演會を開催。聴講者40名餘。數名の辯士によりエス語の本質、文法的構造等に就いて話された。之に續いて、約10日間初等講習が開かれ10名餘の同志を得た。尙4月28日より三田、四谷合同の會話練習會を毎土曜16時より1時間半づゝやつてゐる外、草刈氏の世話で病院内で中等程度の人々の間に會話の練習が行はれてゐる。★5月26日18時半より四谷慶應病院內三四會館にて醫學部エス會親睦會を開催會する者十數名、同會館の Komforta ĉambreto に卓を圍んで interbabilado に時を忘るゝ中に晚餐、Aranĝanto 草刈氏の盡力により室内に備へられた fonografo を聴く中、19時 Alexander 嬢來會。會話は自ら女史を中心にして再び vigla になる。後間もなく粟飯原氏、小澤、竹島 Casey 諸嬢來り會し、一段と gaja な interbabilado が始まる。話題は A 嬢の Bahaismo, C 嬢の Vegetarismo を中心に轉々し、殊に望月博士の Spritaj Paroloj には一同數度ならず抱腹した。かくて21時半萩原氏の閉會の辭に次ぎ、慶應々援歌、Espero, Tagigo 等の Diskoj を聴き楽しく散會した。★クララ會:——5月20日13時半より佐々城氏宅にて會合。會する者10名。アレクサンダー嬢も出席。歡談の後16時半散會。次會に秋田雨雀氏歸朝歡迎の會を催しその際 Nokto de landolimo の reklamado をやる事としその役割をふりあてたりした。

名古屋

名古屋エス協會では、5月15日より毎週火曜19時半より2時間の豫定で初等講習を開催、尙同月4日より毎金曜同時刻に中等講習を開催した。★名古屋エスペラント協會主催の中等科は毎週金曜開催。用書は Botistoj, 研究科は「父歸る」に依り毎日曜開催。但し最後の日曜に Revuo の研究。講師は兩科共に下村鑛造氏。★本年の第二回初等講習は5月15日より毎火曜に開催。時恰も第三師團動員下令に當り受講希望者少なく10名。用書 A. N. のテキスト。講師山田弘氏。★中等、研究兩科の受講希望者は大學病院前電停北半町東側同協會宛照會を。★中區音羽町四ユーナ・エスペランティスト協會は毎週水曜に初等、金曜に中等科開催中。

京都

5月2日より京大病院大講堂にて初等講習開講、講師は風間氏、尙當日展覽會をも催し豫想外の人出で、エス書

籍の購入者も可成り多かつた。★5月11日三高エスペラント會は委員會において大多數を以て校友會入部を許され、こゝにエスペラント部公認せらる。★5月14日三高でロンドン塔の輪讀を始む、25名。★5月15日京大樂友會館にて19時より例會あり、龜岡より借用した Privat の Disko を聴き楽しく話し合ひ、又卓上演説の通譯等をやり八木氏の「産兒の腦出血について」エス語演説があり、矢戸氏がこれを通譯された。出席者拾數名。★5月17日三高においてエスペラント部としての最初の茶話會を開催、來會者20數名。部長及理事、係を下の如く決定。

エスペラント部々長、兒玉鹿三教授

理事：桑原、池垣、吉田、河瀬

係：圖書係——津路、中山

記録係——桑原、田野、竹廣

會計係——池垣、西川

編輯係——奥山、河瀬

講習係——石井、吉田

5月21日より三高では毎週月金の午休み、月水の放課後、初等講習終了の人々の爲に「骸骨の跳舞」を輪讀。★5月21日龍大では紀念祭當日エスペラント展覽會を開く筈。

大阪

4月25日の夕、O. E. S 主催になる講演會が Y. M. C. A. の大講堂で催された。Arangantoj の熱心な宣傳により、聴衆場内に充ち、二階に上る様な仕末であつた。辯士は相坂氏。之について同27日より初等講習會を開催した。★東區北久寶寺町衣川商店では此程「靈の審判」を偲ばせる様な“Nova”なる商品名を各方面の依頼により婦人向の綾地で秋冬の子供服にも又適應はしいコート地の名につけ、其 Katalogo は既に全国的に配付されてゐるこのこと。(福西氏報)

仙臺

二高エス會では此4月から全部エス語の Monata Raporto el Japanujo なる謄寫版刷りの小冊子を發行し、日本エス語普及状態を海外に報道することに努め他方校内には一般學生に對し、宣傳ビラによつて、海外同志との個人的文通の申込を勧誘し可成りな成績をおさめてゐる。

金澤

金澤一中エス會は創立以來同地エス語運動に多大の功獻をなして來たが、同會々長内田氏が教職を退かれてからは、一時同會の活動に一頓挫を來たした。而るに本年4月新學期に入り、同校教員小原氏を會長とし、野島、安田、小川諸教員を贊助員となし、大に會員募集に努めた結果、會員約60名の多數を得た。此機に乘じ4月14日よ

り毎週土曜放課後 初等講習會を開講したが、講習生61名に達し以外の成功を見た。講師池田氏。尙4月25日校内雄辯大會に際し、高橋吉本兩君はエス語の爲に萬丈の氣焰をあげた。

吳市

同市エス語研究會では此程同市々立圖書館内に館長の賛同を得て博士肖像を掲げ、尙宣傳ポスターをも掲示せられし由。(3. 13 書信)

水戸

同市に於ては同好の士相集つて水戸エスペラント會を創設。同會は主として常磐一般労働組合に屬する労働者によつて組織せられ、今般3月10日より20日まで初等講習會を開き、茨城縣下に於けるエス語普及の第一聲をあげるこゝとなつた。(三田氏報)

宇都宮

宇都宮高等農林學校エスペラント會では5月1日から同校内で毎日晝休み時間を利用して初等講習會を開始、講師は同校横川教授。研究科は毎週木曜椎橋好氏指導のもとに開催。(大沼氏報)

門司

3月5日より一週間 大阪朝日門司支局樓上にてエスペラント初等講習開催、會員22名講師明專教授磯部幸一氏、閉會後カフェー鳳凰で茶話會開催。尙引繼いで毎週火曜19時より同支局樓上にて研究會開催中。★4月5日より1週間、門司エスペラント會主催の下に大阪朝日門司支局階上にてエス初等講習開催、講師磯部幸一氏。閉會後親睦を計る爲茶話會を開く、席上支局長谷氏の自己紹介を兼ねてのエス語實用化の話は皆に強い刺戟を與へた。尙引續き研究會を作り、谷氏の好意により、社の一室を借り毎火曜日18時に會合することゝした。(寫眞參照)

後藤寺

3月18日同町公會堂に於て宣傳講演會開催聴衆數100名に達す。磯部明專教授林道治氏、林茂氏、中村榮女史尙同町田江時次郎氏主唱の下にエスペラント會を組織され九州エス聯盟加入。

中津

4月30日聯盟本部江口幹事來訪され石丸鎮雄氏方にて茶話會開催、江口氏よりエス語にて大阪大會の報告談話あり、日本エスペラント學會中津支部設立準備中。

別府

5月6日18時より大分縣エスペラント大會開催、大分、中津、別府より多數同志の出席あり歡を盡して22時散會。

福岡

4月11日より長崎、大阪大會のため休講中の中等科、高等科の講習を開始、毎週水曜晝夜二回、用書 Krestomatio 講師江口氏、會場俱樂部。★九州齒科醫專で

は4月下旬より初等講習開催會員20名講師安部正信氏。★築上郡では築上エスペラント會創立紀念のため宣傳講演會を上田順三、内丸辰雄、古見、有賀宗吉の諸氏と力を併せ磯部幸一教授中西義雄氏等を招聘し八屋町清高幼稚園にて開催。築上中學校長始め青年團員、中學生、小學生等多數聴講盛會であつた。中津町より石丸氏御子息同伴應援にこられた。19日の福岡日々及中津新聞はこの會の記事をのせてくれた。二次會として翌日々曜小舟にのつて鰯網を見物した。(玉水俊寛氏報)

北九州

今回北九州エス運動團結のため新に北九州エスペラント協會を設立した。事務所は戸畑市淺生町3丁目磯部幸一氏宅である。同志の御援助をのぞむ。

福井

5月7日19時より新福井日報社主催の下に福井商工會議所講座室に於て福井市最初のエス語一回講習會が開催され出席者卅有餘名熱心に聴講した。講師は同新聞主筆保見朝花氏。(名古屋山田弘氏報)

長崎

會話會。5月8日20時より市内馬町淺田博士邸に參集その第一回を開催した。爾後引續き第二第四火曜日に同博士邸にて催す。★市民の綠化に圖書館利用の有効な事を Antverpeno の Schoofs 氏も淺田博士に話されたそうで我會もその趣旨を賛し縣立圖書館へエス書籍寄贈。★4月27日夜本年度第二回初等講習も終つたので講師迫氏の慰勞をかれ高原邸で紀念撮影の上(寫眞參照)茶話會を開催した。★5月4日高原邸で晚餐會出席者18名。植田教授の大阪大會の報告あり。辻氏の提案により會話會を創設す。★長崎市聯合青年團の機關紙「長崎の青年」誌上五月號より植田教授のエス講座をのせる。此企は秦理事長の希望による。★長崎税關の貿易展覽會に對し貿易と國際語なる圖表をだし右に對する資料を排列參觀に供した。材料は淺田、高原兩氏より借用。

函館

函館第14末廣町青年團例會に於て同志船越氏エス語宣傳演説を爲し團長渡邊氏は種々の實例を掲げて同氏の演説を聲援し、爲めに、講習の即時申込者5名を得た。★函館組合教會堂にて4月8日音樂會を開催せるを好機とし、同志亘理氏は入場者に宣傳ビラを配布し不斷の努力を續けた。★4月1日19時より函館日々新聞社講堂に19回エス講習會終了式を行ふ。伊藤幹事の舉式の辭に始まり頌歌エスパーロを合唱、西田副會長の挨拶につぎ、井上講師、加藤、伊藤、小田島、矢戸(武)吉田の諸氏はエス語、ロシア語、

英語にて快辯を振ふ、高桑顧問、十年前、最初の講習開催當時の思出を語り、茶菓を喫しつゝ餘興に移り、自稱『貧弱にして勇敢なる』清水君のアイヌ民謡、フランスの歌、漫談等あり、吉田、能登氏のエス語歌。富原氏のハモニカ獨奏。船越氏の童謡二つ。殊に最後の笑話是一同を抱腹絶倒せしめた。かくして記念撮影後、タギーダヨを歌ひ、23時盛會裡に散會。——寫眞參照——(小田島氏報)

大牟田

4月13日夕大牟田エスペラント會は同日來訪の江口氏の爲に歓迎晚餐會を催す、出席者20數名、目下中等、初等講習會開催中。尙4月29日九大工學部の伊藤氏來訪大牟田公會堂に於て歓迎會開催。

熊本

五高に於て初等講習開催、5月初めより毎週火木兩日晝休み一時間を利用す、出席者75名。

鹿児島

毎月二回高農重松教授宅に高農、七高の同志參集研究會を續行。

満洲

1月22日 満洲醫科大學では、満洲エスペラント聯盟を創設。會する者14名。

朝鮮

京城府慶雲洞、朝鮮エスペラント協會は5月12日同會會館にて定期總會を開催し、同會委員を次の如く改選し(張錫臺、崔學魯、金億、羅元和、白南奎、白奎鉉、李銅南の七名)尙將來に於ける同地方のエス語普及宣傳方法等を協議した。同地のラヂオ放送は愈々18日を以て終了したが、豫想外の響反を見、五六十里を距る遠隔の地からわざわざ講習をうけに來ると云ふ熱心さであつた。5月23日より1ヶ月、同會館にて、毎日20時より22時迄初等講習開講。(李氏報)

奉天

満洲エスペラント聯盟第一回總會 既報満洲エス聯盟は去る5月13日午前9時より奉天の満洲醫科大學内でその第一回總會を開催した。決議事項は(1)次回總會開催地は大連とする事、(2)聯盟旗をつくる事、(3) Jugoslavujo の Esperanta Rondo de Grafikaj Gelaboristoj へ寄贈の東洋で刊行されたエス出版物に付、の諸項。午後6時半から晚餐會。★奉天エスペラント會では5月18日から奉天圖書館にて鈴木秀四郎氏指導の下に初等短期講習會を開いてゐる。

(伊藤氏報)

★ 雄辯大會豫告 ★

東大、慶大、千葉大、帝國女專主催の東京醫學生雄辯大會は6月16日(土)15時より帝大解剖講堂にて開催の筈。來聴歡迎。

★ 個人消息 ★

★平岡昇氏 4月東京帝大佛文科御卒業目下療養の爲福岡に歸省中。

★横須賀の松葉菊延氏去る 4月同志橘川葉瑠子嬢と華燭の宴をあげらる。

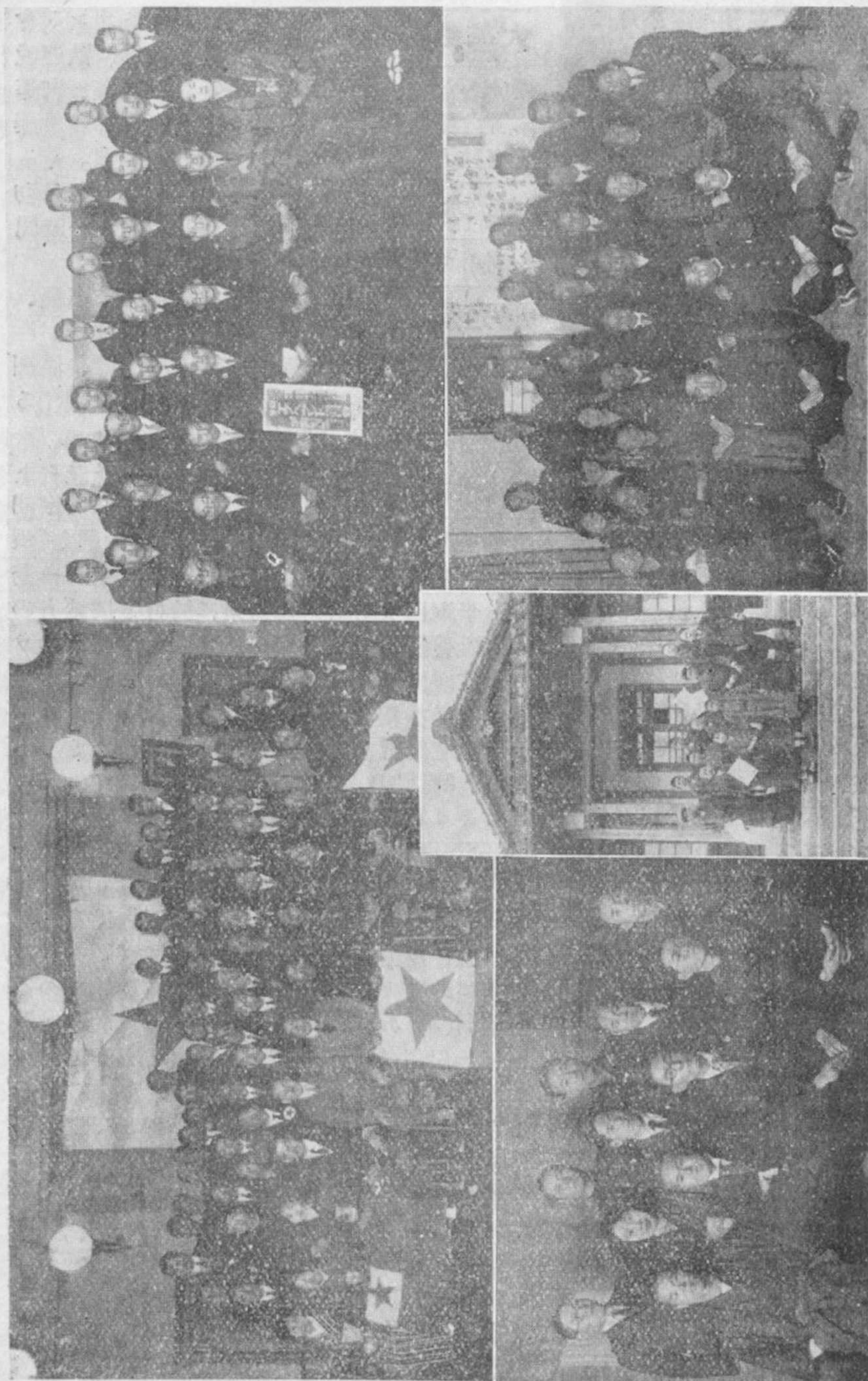
★薄井富美子嬢は 5月16日銀行家諸葛順一郎氏(十五銀行新橋支店)と結婚せられ澁谷豐澤 37に新家庭を営まる。

★秋田雨雀氏 5月下旬露國より歸朝。

新聞雜誌とエス語

★エス語一回講習に就て、論説(4月27日新福井日報)——保見朝花氏。

★突然の外人來訪とエスペラント、論説(5月3-4日新福井日)——山田弘氏報。



【寫眞説明】〔上圖右〕門司に於ける初等エス語講習會。前列中央右——磯部講師、同左——谷辰次郎(大阪朝日門司支局長)。〔上圖左〕第十六回日本エス大會の京都に於ける二次會にて催された學生雄辯大會紀念撮影。榮ある Orataroj は前列右より——矢戸、川藤、細谷、桑原、田邊、宇都宮、田中、八木、安田の諸氏。後列左より——二人目佐藤氏、前列左より二人目——三宅嬢、(其右——渡邊嬢、左——福富夫人)〔下圖右〕函館における第十九回初等エス講習會。〔下圖中〕三重縣飯南郡波瀨村補習實業學校のエス講習會。洋服を着たのが講師藪谷氏。〔下圖左〕横須賀における小坂氏歡迎會。前列右より——香川正夫、小坂狷二、清水勝雄、宗近眞澄。後列——大橋宇之吉、滿川重美、上田藤太郎、松葉菊延、長尾友七、松葉夫人、新倉松次郎の諸氏。

アカシアの花

粟飯原 晋

6. 發音哲學

『フランス語では、どんな一語の中の、どんな小さな一つの綴りでも、その一つ一つが對等の價值のあることを第一に確かに心にこめて置かなければいけない。フランスは共和の國だ、フランスは民衆本位の國だ、如何なる個人にでも價值を認める。一つの語は一つの社會である。その中の如何なる一員にでも價值を認めなければならない。平等の精神、エガリテの精神は、一語一語、一音一言の中にもこめられてゐる。それを忘れるから君の發音のやうに、むやみに急いで、半分吞込んだり、嚙みつぶしたりしてしまふ。音を吞み込んではいけない、嚙みつぶしてはいけない。つまり音を虐待するからいけない。もつと大切に取扱はなければいけない。そして要もない所へ揚音をつけるのも悪い習慣だ。それもエガリテの精神が十分解せられないから起る現象だ』と或るフランスの老人が、フランス語の發音哲學を説いたそうだ。此の哲學はフランス語よりも世界の民衆を本位としたエスペラントに、もつとしつくりと適合してゐる様に思へる。

7. “KIMONO”

1922年英國で出版された小説に“KIMONO”がある。日本を背景にした小説で、一時世界の文壇に大流行を來したものである。作者は John Paris の假名を用ゐてゐるが、もと東京の英國大使館員であつた人であるとか。英國人ダヨフリー・バーリントン大尉が日本の少女、赤坊の時父をフランスに來て、全くヨーロッパ風に教育された藤浪アサ子と結婚して日本を訪問し、初めて愛妻の一家が吉原の遊廓にある事を知り、いたましい娼婦の生活を見て失望したが、遂に彼女の一族に依つて愛妻を奪ひ去られると云ふ筋である。

この小説の中に、前英國駐在日本大使で、現在は政界の大立物になつてゐる齋藤伯爵といふ人物が出て來て、

『…今日では全世界が世界を一家とするに云ふ様なコスモポリタンな考へになりつゝある危險があります。國際主義の形が持ち上りつゝあります。言葉はエスペラントで、文字

は速記、國家がなく、中世紀のスキス人が傭兵になつて戦つた様に、金を餘計に出すものゝ爲めに戦ふと云ふ有様です…』と話す場面がある。

8. エジプトとトルコ

或るエジプトに住む人の話。『私はロシア人であり、私の妻はイタリー人であるので、その交際はロシア人、イタリー人に亘つてゐる。私共の間に出來た一人の娘はロシア語でも、イタリー語でも話すが、フランス人經營の學校に通學してゐるので、大抵の場合フランス語を使つて用を達してゐる。召使の一人はギリシアの婆さんで、ギリシア語しか話せず、もう一人はアラビアの少年である。彼はイタリー語も少々解るが、役に立たぬので用事をさせる時にはアラビア語で命じてゐる。』

エジプトの裁判所では、アラビア語で訊問が行はれ、英語で答へられ、辯護にはイタリー語を用ひ、判決にフランス語が使用せられる様な例は珍しくないそうである。

× × ×

トルコには『人種の市』と稱せられる程、種々雑多の民族が來住して居り、茲に『言語の市』が展開せられてゐる。嘗てコンスタンチノーブルに居た人は、此の市で二十二種の言葉を耳にしたと書いてゐる。此のトルコの家庭では、勿論トルコ語が繰られてゐるが足一度び屋外に出づれば、トルコ人に對してはトルコ語を以てし、ギリシア人に對してはギリシア語又はフランス語を以て會話し、尙教養ある者は同民族間に於ても、家庭以外ではフランス語で會話し、學校に於ては尋常科第三學年よりトルコ人でもフランス語（特殊の學校では英語又はドイツ語）を教へられ、市中に於ては外國人とフランス語、ドイツ語或は英語で話してゐる。けれども此の『言語の市』に於て最も勢力のあり、Esperanto の役目を務めてゐるのはギリシア語であつて、トルコ語が出來なくてもギリシア語さえ知つて居れば、立派に町内のつき合ひが出来る。

エスペラント初級講座

【第九講】

守則

1. 最初から本文の譯讀を試みるこゝ。但、極く初歩の方々は先づ譯文によつて内容をつかむのもよろしい。
2. 單語、語法の不審な箇所は番號により、單語、語法の欄を参照し更に譯文によつて全體としての意味を闡明すること。

Dio de Dormo—Ĵaŭdo—

“Vi scias¹?” diris la dio de dormo, “nur ne timu; jen vi vidos malgrandan muson²!” Kaj li antaŭtenis³ al li sian manon kun⁴ la malpeza,⁵ ĉarma besteto.⁶ “Ĝi venis, por inviti vin al edziĝofesto.⁷ Jen estas du musetoj, kiuj hodiaŭ nokte volas interedziĝi.⁸ Ili⁹ loĝas¹⁰ sub la planko¹¹ en la provizejo¹² de via patrino.”

“Sed kiamaniere¹³ mi povos trapuŝi min tra la malgranda mustruo¹⁵ en la planko?” demandis Hjalmar.

“Ne zorgu,¹⁶ mi ĉion faros¹⁷!” respondis la dio de dormo. “Mi jam aranĝos,¹⁸ ke vi estos sufiĉe¹⁹ malgranda!” Li aspergis²⁰ Hjalmaron per sia sorĉa²¹ ŝprucigilo,²² kaj la knabeto tuj fariĝis ĉiam pli kaj pli²³ malgranda, ĝis li fine²⁴ estis nur tiel granda kiel²⁵ fingro.

“Nun vi povas prunti al vi²⁶ la vestojn²⁷ de la stana²⁸ soldato; mi opinias,²⁹ ke ili nun jam estos konformaj³⁰ al vi, kaj bone aspektas,³¹ kiam oni en societo³² montriĝas³³ en uniformo.³⁴”

“Jes,” diris Hjalmar, kaj post unu momento li estis vestita kiel plej ĉarma stana soldato.

“Ĉu vi ne volas esti tiel afabla³⁵ kaj sidiĝi en la fingringo³⁶ de sinjorino³⁷ via patrino?” diris la malgranda muso, “tiam mi havos la honoron³⁸ tiri³⁹ vin.”

“Ho ĉielo! ĉu fraŭlino mem volas fari al si la klopodon⁴⁰!” diris Hjalmar; kaj tiel ili veturis al la edziĝofesto de la musoj.

Komence ili venis en vastan⁴¹ koridoron⁴² sub la planko, kiu estis nur tiom alta, ke⁴⁰ ili povis veturi tra ĝi⁴¹ en la fingringo, ne puŝigante⁴⁵ per la kapo al la plafono⁴⁶; kaj la tuta koridoro estis prilumita⁴⁷ per putra⁴⁸ ligno.⁴⁹

“Ĉu ne odoras⁵⁰ ĉi tie belege?” diris la muso, kiu lin tiris; la tuta koridoro estas frotita⁵¹ per lardo⁵²! Ekzistas⁵³ nenio pli bona!”

(Daŭrigota)

眠りの神——木曜日——

『何だか知つてゐるかえ、こはがるんちやないんだよ。それ、可愛い、鼯鼠(ネズミ)を見せてあげるから。』と眠りの神は申しました。そして神は軽い、可愛らしい生物(鼯鼠)の載つた手を彼(ヤルマール)の前に差延べました。

『これはお前さんを結婚式に招待しようと思ふんでやつて来たんだよ。二匹の鼯鼠が今晚結婚するんで。その御夫婦は床下のお前のお母さんの倉庫の中に住んでゐるんだよ。』『だけど僕、床にあるあの小さな鼠の穴へ如何うしたら入り込むことが出来るの』ヤルマールは尋ねました。

『心配しないでもいいさ。わしが何もかもしてあげるから』と眠りの神は答へました。『わしはお前さんが結構少なくなる様に取り計つてあげよう。』眠りの神は魔法の噴霧器でヤルマールに霧を吹きかけました。すると少年は忽ち見る見る中に少なくなつて了ひました。そしてさうさう指許りの大きさになりました。『さあこれでお前さんも錫の兵隊さんの服を借りられると云ふもの、その服も今ではお前にしつくり合ふし、いざ正服姿で人前へ出て立派に見えると思ふよ。』

『さうだよ』とヤルマールは答へました。一瞬の後にヤルマールは世にも可愛い、錫の兵隊さんの服を着けてゐました。

『坊ちゃんはお親切にお母さんの指環に座つて下さるでせうね。そうすりやあたしに坊ちゃんを曳かせて戴きますわ。』と小さな鼯鼠は言ひました。

『まあ、何だつて！ではお嬢さんがそんな面倒を見て下さるの』とヤルマールは言ひました。こうして彼等(ヤルマールと鼠)は鼯鼠の結婚式へ出かけ(乗物に乗つて)しました。

初め彼等は床下の廣い廊下へやつて來ました。それは彼等が天井に頭をふれずに、指環にのつて通れる位の高さしかありませんでした。そして廊下全體が腐つた木材で輝らされてゐました。

『此處は本當に好い香がするでせう。廊下全體が脂でぬりこんであるんですもの。これ程いゝことはありませんわ。』とヤルマールを曳いてきた鼯鼠は言ひました。(續く)

【單語と語法】

1. (Vi scias) kio estas tio ĉi? を補つて見るゝ意味が明瞭になる。2. 鼯鼠。これに對して普通の鼠を rato. 3. antaŭ'teni~teni antaŭe. teni は物を支へる、保つ意味であるから、こゝでも鼠を載せて、前方で之を支へてゐる意味に解するのが正しい。antaŭteni が靜的なるに對し etendi (差し出す) は動的である。4. Kun は其場合々々によつて色々の意味に解せられる。例、lito kun ruĝaj silkaj kusenoj. 赤い絹の蒲團のついた寢床。La juna, bela virino kun la gracia talio, la blankaj manoj kaj silkecaj nigraj haroj. しなやかな腰、白い手、絹の様な黒髪を持つた若い美しいその女。5. mal'peza 軽い。6. 小さな獸(鼠のこさ)。7. 結婚式、結婚の宴。8. inter-edziĝi (互に) 結婚する、geedziĝi と同義。9. du musetoj. 10. 住む。11. 床。12. 倉庫、貯藏所。13. 如何にして、どんな方法で。14. tra'puŝi min~puŝi min tra. ……を通して自分をつき入れる。15. mus'truo 鼠の穴。16. 氣を配る、配慮する。Ne zorgu~Ne ĝenu vin~Ne faru mem al vi la klopodon. は何れも同じ様な意味に用ひられる。17. わしが一切を引受けるから。18. 整へる、配置する、やりくりをする。19. (sufiĉe malgranda) por trapuŝi vin tra la mustruo の意。sufiĉe は又軽く、かなりさか結構さか譯すさよくその氣持が出る。例、Mi fartas *sufiĉe* bone. 結構丈夫であります。Ŝia perdo estis *sufiĉe* granda. 彼女の損失は可なり大きかつた。20. 灌水する。21. 魔法の。22. 噴水器。23. 次第々々

に一層。類例、La ŝipo ĉiam pli kaj pli malproksimiĝis, tiel ke ĝi fariĝis ĝuste tiel malgranda kiel unu punkto. 船は段々遠ざかつて、丸で點の様になつた。24. ĝis……fine 遂に……する迄になつた。例、La alaŭdo flugis alten, ĝis ĝi fine sin kaŝis malantaŭ la nuboj. 雲雀は空高く飛んで行つた、そしてさうさう雲に姿をかくしてしまつた。25. ……と同じ位の大きさに。26. 借りる。27. 着物。28. 錫の。29. ……と考へる、思ふ、……と云ふ意見を持つてゐる。30. シツくり合ふ。31. 外見上……に見える。32. 世間へ出て、人前で。33. montr'igi~sin monti 現はれる。34. 軍服を着て。35. 親切な、氣のいい。36. 指環。37. 此種の用法は敬語として用ふるもので、例へば、Generalo via patro. Sinjoro Profesoro Doktoro A. 38. 光榮を持つ、光榮に存する。39. 曳く。40. 自分に對して骨折をする、面倒を見る。41. 廣々した。42. 廊下。43. ……程、それ程高かつたに過ぎなかつた。例、Li estis nur tiom peza, ke li apenaŭ povis stari ĉe la plej malforta vento. 彼はチヨツとしたそよ風にも立つてゐられない程な重さしかなかつた(……程輕かつた)。44. planko. 45. 押し合ふ、ぶつかる。46. 天井。47. pri'lumi(……に就いて)輝す、動詞の接頭語として用ひらるゝ pri は住々直接的補語を用ひ得る様な形を取る。例、prikanti (ies heroaĵon), pritranci la koron, prilabori terpecon. 48. 腐敗した。49. 木材。50. 臭ふ。51. 擦る。52. 獸脂。53. ekzistas~sintrovas~trovigas~estas

QUO VADIS

【クォ・ヴァディス】

[de H. Sienkiewicz. Vol. III, chap. XXIII]

Subite eksilentis la amfiteatro. Kvazaŭ unu homo ekstaris la korteganoj, ĉar io eksterordinara okazis sur la areno. Ursuso jam preta morti humile, ekvidinte sian reĝidinon sur la kornoj de l' sovaĝa besto, eksaltis kiel brulvundita kaj kurbiginte komencis kuri al la furiozanta uro.

El ĉiuj brustoj elŝiriĝis mallonga krio de l' mirego, post kiu eksilentis la cirko. Ursuso dume atingis la ŝaŭmantan beston kaj kaptis ĝiajn kornojn.

Ĉiuj brustoj ĉesis spiri. En la amfiteatro oni povis aŭdi flugantan muŝon. Oni ne kredis al la propraj okuloj. De l' tempo, de kiu ekzistis Romo, oni vidis nenion similan.

Ursuso tenis la beston per la kornoj. Liaj piedoj penetris ĝis super la maleoloj en la sablon, lia dorso kurbiĝis, kiel streĉita pafarko, la kapo kaŝiĝis inter la ŝultroj, sur la brakoj la muskoloj tiel ŝvelis, ke la haŭto preskaŭ krevis de ilia premo, sed li haltigis la uron. La besto kaj la homo restis senmovaj, al la rigardantoj ŝajnis ke ili vidas pentraĵon, prezentantan la heroaĵon de Herkuleso aŭ Tezeo, aŭ ŝtonan statuon. Sed en la ŝajna senmoveco oni povis rimarki la teruran penegon de la batalantaj fortoj. Ankaŭ la uro, same kiel la homo eniĝis en la sablon, kaj ĝia malpala, vila korpo tiel ŝvelis, ke ŝajnis simila al grandega globo. Kiu malfortiĝos unua, kiu falos unua? jen estis la demando,

急に圓戯場はひっそりと静まり返った。闘技場には稀有の事が起つたのでそれを見る爲に廷臣は言ひ合せた様に總立ちとなつた。柔順に死なうと考へてゐたウルススも姫君が野獸の角に縛られてゐるのを見るに、火につかれた如く躍り上つて狂へる野獸目がけて後を追うた。あッ!と云ふ叫び聲が各所で聞えた。そして其後は亦競技場は深い沈黙に陥つた。かくする内に追ひついた彼は兩手で泡をふいてゐる牡牛の角を壓へた。誰もが息を殺した。闘技場の中は蠅の羽音さへも聞きわけられる程ひっそりとした。觀衆は自分の眼を信じ兼ねた。羅馬始まつて以來かゝる光景は、嘗て見た例(きゝ)がなかつた。

ウルススは野獸の角を押へた。兩足は踝まで砂の中にめり込んだ。彼の背は弓の如く曲つた。彼の頭は聳つ兩肩の中に隠れた。兩腕の筋肉は膨んで、皮膚がはち切れさうに見えたが、彼はちつと牡牛を踏み止めた。人と野獸とはお互に微動だもしないので、群衆にはヘルクレスかテシウスの所業を描いた繪畫が石像を見てゐる様に思はれた。併しこの不動の状態の中にも二人が死力を盡して闘つてゐることは明らかであつた。野獸の脚もウルススの足も同じく次第に深く砂の中に陥ち込み、黒い髭毛の體は、大きな毬の様に曲つた。何れが早く疲勞するであらうか。何れが早く負けるになるであらうか。此疑問は、闘技を好む觀衆に取つて、羅馬全體よりも又羅馬の全世

kiu en tiu momento estis pli grava por ĉi tiuj amantoj de l' cirkaj bataloj, ol tuta Romo kaj ĝia mondo-regado. Ursuso estis nun por ili duondio, kiu indas adoradon kaj skulptaĵojn.

En la amfiteatro oni vidis homojn, kiuj, levinte la manojn, restis tiel senmovaj; ŝvito aperis sur la fruntoj de aliaj, kvazaŭ ili mem batalus kontraŭ la besto. En la cirko oni aŭdis nur la sibladon de la flamoj en la lampoj kaj la murmureton de l' karboj, defalantaj de l' torĉoj. La voĉo ekmortis en la buŝoj de l' rigardantoj, la koroj batis, kvazaŭ volante krevigi la brustojn. Al ĉiuj ŝajnis, ke la batalo daŭros jarcentojn.

Same staris sur la areno la homo kaj la besto ŝajne senmovaj. Subite eksonis bleko, simila al ĝemo, post kiu ĉiuj ekkriis kaj ree ekregis sirento. Al la homoj ŝajnis, ke ili ŝonĝas: la grandega kapo de l' bovo turniĝis malrapide en la feraj manoj de l' barbaro.

La vizaĝo de Ursuso, la nuko kaj la brakoj ruĝiĝis purpure, la dorso pli forte kurbiĝis. Oni povis rimarki, ke li uzas la reston de siaj superhomaj fortoj, sed ke ili sufiĉos jam por nelonge.

La blekado pli kaj pli raŭka kaj dolora de l' uro miksiĝis kun la siblanta spirado de la brusto de l' grandegulo. La kapo de l' besto turniĝis pli kaj pli, el la buŝo eliĝis la longa lango kovrita de ŝaŭmo.

Ankoraŭ unu momento, kaj la orelojn de pli proksimaj rigardantoj atingis kvazaŭ krakado de rompataj ostoj. La besto falis teren kun la nuko morte turnita.

[trad. de Kabe]

界に及ぶ支配權よりもこの瞬間に於ては遙かに重要な意義を含んでゐた。彼等の眼にはウルススが、石像を立てて賞讃するに足る半神の様に見えた。

圓戯場の中には呆氣に取られて手を舉げた儘下さずにある者もゐた。又自分が野獸と闘つてゐる様に力んで、額に汗してゐる者もゐた。闘技場内は灯の燃える音と、手火の焼け崩れる音以外に何も聞えなかつた。言葉は口内で消えて了つて、心臓は張り裂ける様に胸の中で脈動してゐた。闘はこの儘幾百年も續くのではないかと思はれた位であつた。

しかし人も獸も更に動かず闘技場に突立つた儘であつた。突然呻きに似た唸り聲が闘技場を震はせた。觀衆もそれに應じて短い叫び聲をあげたが直ぐ又もその靜けさに還つた。

人々は夢見る心地でウルスス(蠻人)の鐵腕の中に巨大な牡牛の頭が轉するのを眺めた。彼の顔も、首も、腕も、紫色を帯びて赤くなつた。彼の脊はますます曲つた。彼は明らかに今、その超人的な怪力を出し切つたのである。いかに彼でも、この儘緊張を長く續けてゐることは出来まい。次第に聲が噎れて、苦しうになつてゆく野獸の唸りはウルススの吐く息の音に交つて聞えた。牡牛の頭は次第に振り廻されて咆を吹いてゐる舌が、だらりと顎の間にのぞいた。次の瞬間めきめきと骨の碎ける音が、近くに座席を占めてゐる者の耳には聞えた。そして野獸は首が折れてごたりと地上に横倒れになつた。(木村 毅譯)

——脚註は 175 頁——

質 疑 應 答

★Fundamenta Krestmatio, p. 326:

De l' patro de l' via la krono
Por mi ĝi ne estas havinda!
For, for lia sceptro kaj trono —
Vin mem mi deziras, aminda!

lia の li は何を指すのですか。

(京都府、上村氏)

◇答。li は via patro を指す。この versoj を prozo に書きかへれば

La krono de via patro (—ĝi) ne estas por mi havinda. For (=forĵetita) estu lia sceptro kaj trono. Vin mem mi deziras havi, mia aminda!

あなたのお父様(王様)の王冠なんぞ私には欲しくはありません。お父様の王笏や玉座なんぞ何になります(すてゝしまへ)、私のほしいのはあなた自身なのです、れえあなた(愛らしき者よ)。

★同書 p. 328.

Kie niaj antaŭuloj
En la mondo sidas?
Iru al la superuloj,
Serĉu ilin ĉe l' subuloj —
Kiu ilin vidas?

全體の意味を。

(同 氏)

◇答。これは學生の酒でも飲んで歌ふ元氣な太平樂を並べた歌です。『一體全體世界の何處に吾々の先輩が居るのだい。えらい人の處へ行つて見る(居りはせんぜ)。下様の奴等の處に行つてさがして見るがよい(矢張り居ない)。誰がそんな先人が見つかるもんか(人は皆んなごつかへ消えてしまふんだ)。

★同書同頁:

Vivu, floru nia regno
Kaj regnestro nia!
Kaj amikoj mecenataj,
Protegentoj estimataj
De l' akademio.

の protegentoj の意。

(同 氏)

◇答。protegi = protekti, patroni. 庇護する、後援する。

★Tiel pasas dudek jaroj, plenaj de vojaĝoj, ventegoj, renkontoj, aventuroj, — pasas preskaŭ nerimarkite. (同書 p. 95, l. 9).

の renkontoj の意。

◇答。(色々な人や事に)出遇ふこと、色々な

目に遭遇すること。『かくて波瀾重疊(色々な旅行波瀾遭遇事件にみち)たる二十年は過ぎゆく——殆んど人目につかずに (ne'rimarkite) 過ぎゆく』。

★Tie li laboras super karto kaj globoj geografiaj, kiuj turnas sur sin la atenton de la instruita mondo, korespondas kun instruituloj. (同書 p. 95, l. 12).

◇答。labori の次にはよく super が用ひられる。super はあるものゝ上にそれから離れて物がある、即ちあるものゝ上に身をかゝめる貌ですから、ある仕事にかゝつて(その仕事の上に身をかゝめて)居る意に用ひられます。例、

Ili laboris super la teksiloj.

彼等ははた織り機(の上)につて身をかゝめて)にかゝつて働いてゐた。

Li laboris super nova sistemo de lingvo internacia.

彼は國際語の新案にかゝつてゐた。

Instru'ita mondo 學者社會, 有識者の世間; instru'it'ulo 學者、geografia karto = landokarto 地圖。geografia globo = 地球 globuso, turni atenton sur ion (又は al io) 或事に注意を向ける、注意を引く。

『其の地で(tie)彼は地圖と地球儀との製作に従事し(その地圖と地球儀とは學者社會の注意を喚起した=自身の上に學者仲間の注意を向けた)又學者と文通をしてゐた。

★La Vojevodo (p. 323) は少し私に解りにくいので何卒詩の心を大體教へて下さい。

(同 氏)

◇答。此の欄には少し長すぎますから何れ本誌に註解でも書きませう。

★Palos, Gvineo (同書 p. 94), Berberujo, Lisabono, Islando, Porto Santo (p. 95) の地名は何處にありますか。此の一篇 Nokto の原文は何語ですか。

(同 氏)

◇答。Palos: イスパニア國西南, Provinco Andalusia の町の名。コロムプスが1492年八月三日この地を出帆して米國(實は日本)へ向つたのです。Gvineo: Afriko 西部の國名。Berberujo: berberoj はエヂプトの民族。Berberujo はその地方。Lisabono: ポルトガル國の首府(Lisboa)、イギリス人は「リスボン」と呼んでゐる。Islando: 英國の西北、大西洋

上にある島（イギリス語ではアイスランド）。Porto Santo：太西洋上にあり。Madeiro 島と共に Madeiro 群島を成す。現在ポルトガル領。Nokto の原作は Enbe 即ち N.B. と云ふ匿名です故わかりません。ロシア語ではないかと思はれる。

★“Pru! halt!” “Kio estas?” “Risorto rompiĝis.”（同書 p. 333, l. 1）（同氏）

◇答。『チエツ！止まれ！』『何だ』『ペネが折れやがつた』。Pru は interjekcio です。

★Lingvaj Respondoj の p. 15, l. 9: estas mil fojojn pli facile の mil fojojn の意味及び文法上の意味を御教へ下さい。

（京都市、棚橋氏）

◇答。unu fojon, du fojon…… と千回も重ねてやさしい、即ち『千倍もやさしい、非常にやさしい』。例、

Fariĝis dek fojojn (=dekfoje) pli mallumiĝis. 十層倍も暗くなつた（暗さを十回も重ねた位暗くなつた）。

mil fojojn の目的格になつてゐるのは例の数量の目的格（所謂前置詞省略の目的格）です。per mil fojoj = mil fojojn = milfoje. Sintakso の上から云へば副詞語 (adverbaĵo) です。

Mi dormis dek horojn (=dum dek horoj =dekhore).

La libro kostas dek faankojn (=je dek frankoj).

★La Revuo Orienta 五月號 p. 149 の 67 の la kapon antaŭen; la supron malsupren と目的格になつてゐますが御説明を。（同氏）

◇答。la kapon, la supron の目的格になつてゐるのは同所に註をした通り kun la kapo, kun la supro の前置詞省略の目的格（エスペラント捷徑 p. 34 又は模範エス獨習 p. 167 参照）。antaŭen, malsupren は何れも前置詞省略の中『運動の方向』を示す目的格。

……kun la kapo direktita antaŭen.

……kun la supro turnita malsupren.

なほ類例：

Ni ekiris hejmen (=al la hejmo.)

Li ĵetis la pilkon supren.

Li rigardis supren. 見上げる。

Li rigardis returnen.

但し最後の例は rigardi returne も用ひられる（Zamenhof も兩形式を用ひてゐる）それは returne はそのものが動作を示す副詞であるから理窟から云へば rigardi returne が正しいように思はれるが、然し rigardi supren,

rigardi malantaŭen の形になぞらつて returnen が用ひられるのである。

序乍ら英語の He went home の home などは正に目的格であると思ふ説を出せると思ふ。同様に It cost me 10 francs の 10 francs も目的格と考へてよからう（たゞ英語では名詞には目的格の語尾がないが）。此の場合 home, francs は主格であるとは勿論云へぬ。又 francs は正に名詞だが home の方は冠詞も何もついてゐないから少くとも『副詞』的用法と云つてよろしからう。

エスペラントでは副詞が盛んに活用せられるのに注意せねばならぬ。これは前置詞付の名詞を用ひる文が peza になるが、副詞を用ひる文軽く簡単に云へてよい。例、

Ili kuŝis sur la ventro =surventre.

はらなばつてゐた。

Ili sidis sur la benko =surbenke.

Multe (multo) da homo.

Donu al mi kelke (=kelkon) da libroj.

〔注意〕此の場合 kelken としてはいけない。副詞は名詞でないから動詞の目的語となつた場合目的格 (-n) にする必要はない。運動の方向を示す目的格語尾 -n はその意味の記號（目的語に非ず）であるから名詞、副詞などの區別なくつける。

★同上 64 の venĝi la patron の意味。

（同氏）

◇答。venĝi ～ は『（～のはづかしめ）をそぐ』意、venĝi la patron は『父（がはづかしめを受けそのはづかしめ）をそぐ』即ち『父の敵をこる』意となる。

——QUO VADIS p. 172 の脚註——

Quo vadis? (何處へ行く) ——羅馬の暴君ネロの時代に於ける初期基督教徒の殉教を書いた物語。此 fragmento は同書第三篇廿三章よりとつたものである。amfiteatro 圓戯場。kvazaŭ unu homo 一勢に。areno 闘技場。korno 角。brulvundita 火傷した。uro 野牛。furiozanta 怒り狂へる。el'ŝir'igi el ちぎれ出る。cirko 圓形競技場。ŝaŭmanta 泡立つた。maleolo 踝。sablo 砂。kurb'igi 曲る。ŝtrecita pafarko 張られた弓。ŝultro 肩。muskolo 筋肉。ŝveli 膨脹す。haŭto 皮膚。krevi はち切れる。heroaĵo 英雄的行爲。Herkuleso, Tezeo 希臘神話にあらはれる有名な大力の英雄。en la ŝajna senmoveco 外見上如何にも不動に見えるが、の意。vila 彪毛の。mondo'reg'ado 世界の支配。duondio 半神。adorado 崇拜。

他 山 の 石

學會水曜日例會では Marta の輪講が始まりました。本號からは同書から句を抜きます。

68. Jes と叫ぶものあり; Ne と云ふものあり。

Unuj krias “Jes!” kaj (la) aliaj “Ne!”.

〔註〕 unuj……(la) aliaj…… は unu……(la) alia の複數用法。

Li havas du infanojn; unu estas bona kaj alia estas malbona.

一人はよい子だがも一人は悪い。

Li havas multajn infanojn; unuj estas bonaj kaj (la) aliaj estas malbonaj.

よい子もあれば悪いのものもある。

69. 彼の一生は自己犠牲に外ならなかつた。

Lia tuta vivo estis nenio alia ol sinoferado.

〔註〕 ol が優級比較の pli 以外に伴ふのは alia ol の外次の場合:

Li foriris antaŭ ol li ricevis mian respondon.

私の手紙を受け取らぬ内に (受取るよりも前に) 立つてしまつた。

alia ol は alia krom としてもよい。但し ol は接續詞、krom は前置詞。

70. 結局大多數には従はなければならぬ。

En ĉiu okazo (=ĉiuokaze) ni devas cedi al la plimulto.

〔類例〕

Antaŭ ĉio ni devas propagandi la internan ideon de la Esperantismo.

何はさて置き (何よりも先づ) エスペラント主義の中に含まれる思想を普及しなけれやならぬ。

Post ĉio mi estis prava.

矢張り (結局) 僕の云つた通りだつた。

71. 銀座は東京で一番にぎやかな街です。

Ginza estas la plej vivoplena strato de Tokio.

72. 彼女はぐつたりと手をたらし
て壁によりかゝつて空間をみつ
めてゐた。

Li sin apogis kontraŭ la muro kun la manoj **velke** pendantaj kaj fikse rigardis en malplenan spacon.

〔註〕 velke の代りに senforte, peze などを用ひてもよい。

74. 美々しくないまでもキッチンど
した身なりをしてゐなくては
いけない。

Vi devas esti vestita, **se ne** elegante, **tamen** dece.

〔類例〕

よしんば遅かつたにしるエスペラントを始めたのは感心だ。

Li aprobinde komencis lerni Esperanton, se malfrue.

間違つたつてよいからかまはず話をしなさい。

Parolu kuraĝe, se kun eraroj.

あの人の顔立ちが美しいとは云へないが然し威厳がある。

Li havas vizagon, kvankam nebelan, sed tamen dignoplanan.

75. 彼女は家から出て来る人を目
で見送つてゐた。

Ŝi akompanis per la okuloj la elirantojn el la domo.

76. 彼去つて復歸らず噫悲い哉。

Kia domaĝo, ke li nin forlasis **senrevene!**

77. 彼は彼女の寫眞をじつと見つ
めてゐた。

Li fikis per longa rigardo (=fikse rigardis) ŝian fotografajon = alforĝis ŝian rigardon al ŝia fotografojo.

78. 門を八文字に(一杯に)開いた。

Oni malfermis la pordegon en la plena larĝo.

〔類例〕

彼は往來へ大の字なりにれてゐた。

Li kuŝis sur la vojo en la plena larĝo.

79. ぬり立ての壁からはシツクイの湿っぽい臭いがして來た。

De la fr.ŝe blankigita muro blovis **malsekeca**odoro de kalko.

〔註〕

{ malseka 湿つた, ぬれた。
{ malsekeca 湿っぽい, シメシメした。

{ vitra ガラスの, ガラス製の。
{ vitreca ガラス様の。

La vitrecaj okuloj de la mortinto.

{ silka vesto 絹の衣服。
{ silkecaj nigraj haroj
絹のような(つやのいゝ)くる髪。

80. 床を取つておくれ。

Preparu (=pretigu = ordofaru) la liton.

〔類例〕

風呂敷包から取り出した品物をせつせと片付け始めた。

Ŝi komencis klopodi pri la ordigo de la objektoj, elprenitaj el la pakajo. = Ŝi komencis zorge ordigi la objektojn, elprenitajn el la pakajo. = Ŝi komencis ordometi la objektojn, ...

81. 火を吹く(起す)。

Blobeksciti la fajron.

〔類例〕

火を起す(點火)。

Ekbruligi fajron.

82. 彼は驅けて行つてちきに壁の角を回つて見えなくなつた。

Li kuris for kaj baldaŭ malaperis malantaŭ flekso de la muro.

83. 駄賃は上げますよ。

Mi pagas por la servo.

84. 一陣の寒い秋風が吹き込んで來た。

Ondo (fluo) da malvarma aŭtuna vento enfluis (enblovis) en la ĉambron.

85. 獅子が嘯いた。

La leono **murmuregis**.

〔類例〕

廣間に満ちた多くの人々がガヤガヤ話し合ふごよみで耳も聳るばかり。

La murmurego de multaj interparolantaj homoj, kiuj plenigis la salonon, surdigis min.

86. 彼女はびつくりして二三步あとすざりした。

Kun timo ŝi **retiriĝis** (=sin retiris) je kelkaj paŝoj.

〔類例〕

敵軍退却す。

La malamiko **retiriĝis**.

87. 内へ入つてビシヤリと戸をしめた。

Ŝi (forte) **ĵetfermis post si** la pordon.

〔類例〕

入つたら戸をしめなさい。

Fermu post vi la pordon!

88. 彼女は全身わなわなふるへてゐた。

Ŝi **tuta tremis** = Si tremis per la tuta korpo.

89. 見ず知らずの人からではあるがあんな侮辱を受けようとは思ひもしなかつた。

Mi eĉ ne imagis, ke mi ricevus tian ofendon **kvankam** de homo nekonata.

90. 麥の穂が黄金の波を立てゝゐる。

Tritikaj spikoj **rulis ondojn da oro**.

〔註〕 da を用ひてゐるのに注意。眞の黄金の如くに考へて光景を描いたのである。

和文エス譯添削欄

【第 八 回】

編 輯 部

問 1. 鶏の聲を聞くと同時に鬼共は急いで逃げ去つた。

答 1. La demonoj rapide forkuris ĉe la koka krio.

鶏の聲を聞くと同時にが kiam ili aŭdis
...tuj kiam en la sama tempo kiam
さいるいろに譯されて居り苦心のあさが見えますが ĉe を用ひた人が一人もなかつたのは残念でした。ĉe が動作を表はす語の前に用ひられる時には其の動作の際に、.....さ同時にさいふことになり、時を意味する事になるのです。そして同時にさいふ意味が一番はつきり出るのです。それから鬼さいふのを diablo さか ogro さか koboldo さか かい人 がありました。鬼さいふ様な非實在的なものは所によつて種々の名があり觀念もちがつてゐるので、びつたり一致する譯語はないのですがさいつてどれをつかつてもいい、さいふわけではなく、なるべく觀念の近いものを選ぶか、其まゝつゞり字だけなほして用ひる外ありません。で一つ一つの語が表す觀念をよくしらべて置く必要があります。(これは勿論この場合のみではありません。) くわしい Esperanto-esperanta vortaro の必要が痛感されます。

問 2. あいつ等の話は半分も信用が出来ない。

答 2. Ni ne povas fidi eĉ duonon de tio, kion ili diras.

話さいふのが diro, parolo, rakonto さいるいろになつてゐました。信用が kredi になつたり fidi になつたり konfidi になつたりしてゐました。短い日本語の文を出して嚴密に意味を限定するのは無理ですが、話さか信用さかいふ單語を Esperanto の單語になほすのではなく、少くも文全體を一應頭に入れて消化してからエスペラントで考へるさいふ態度をさるべきです。それにはやはり前例で述べた様にエス語の一語一語の意味を、又その使ふべき場合を研究して置くべきです。Ilia parolo ne povas kredi さいふのがありました。parolo は kredi する主體でなく kredi される客體なので、若し parolo を主語と

するならば povas esti kredata と受身にしなければなりません。

問 3. 風邪にはどんな薬がよく効きますか。

答 3. Kia medikamento bone efikas kontraŭ malvarmumo.

Kia medikamento plej efikas por malvarmumo. と書いた人が多數でした。これは風を引くには(又風邪をおもくするには)どんな薬がいいか、さいふことになります。或動作が有利になさるゝ相手方及び目的物を示す場合に por を用ひるのです。こゝでは其反對ですから kontraŭ を用ひねばなりません。も一度くりかへしていひます por=爲めに、對して。對に、對して=por などゝ日本語さくつつけて簡単に考へて居るとさんだまがひが起るのです。

問 4. 心に大きな悩みを抱いて彼はあてもなく街から街をさまよつた。

答 4. Kun granda ĉagreno en la koro li sencele vagadis de strato al strato.

これは割合に好成績でした。Havante grandan ĉagrenon と書いた人が二三人ありました。それでもまがひではありませんが kun を用ひた方がよいと思ひます。さまよつたを ĉirkaŭeraris と書いた人がありました。これにはさまよふさいふ意味は少しもなく意味をなさない造語です。たぶん ĉirkaŭvagis か erarvagis かの感じがひかと思ひます。こゝではあてもなくさまよつたさいつても決してまがひがつて歩いた意味はないので eraris とはさんだまがひです。

問 5. 私を友達と思ふならどうぞそうしてくれ。

答 5. Mi petegas per la rajtoj de amikeco.

Se vi pensas min kiel amikon, volu fari tiel. 式の答が多數。さう來さうださ待つて

ぬました。友達の権利によつて願ふ、さしない、私を友達と思ふなら……さしたのは無理だつたでせうか。少し突飛だつたでせうか。しかし兩方をよく比較して味つて見て下さい。結局同じ事をいつてゐるのです。だから翻譯は字句に拘泥しないで全體の意をよくのみこんで……さくりかへしていふのです。

問 6. 金の切れ目が縁の切れ目。

答 6. Kiam sako mizeras, tiam amo malaperas.

Sako ne sonas, amiko ne konas.

答案の中から例を二つあげて批評してみませう。1. Kiam la mono konsumiĝas, tiam la rilato rompiĝas. これには文法のまちがひもなく一見よく出来てゐる様ですが、縁を rilato としたのはごんなものですか。人々との間の rilato といふものは種々雑多で、決して金のあるなしには拘はらぬものです。金の切れ目が縁の切れ目、といふ場合の縁も rilato の一種には相違ないが、心と心との特種な rilato 即ち amo をさすのです。必ずしも男女間の amo には限らないでせうか。2. Kiam mankas moneron tiam rompas rilaton. Proverbo らしく口調をさのへた所は感心ですが、いろんな誤まりをふくんでゐます。第一 monero と mono とは非常なちがひで monero がなくても mono はあり得るのです。rompas rilaton には主語がありませんが、何が rilato を rompi するのでせう。

問 7. しばらく田舎で暮さうと思つてゐます。

答 7. Mi volas vivi en kamparo por kelka tempo.

暮すを farti とした人がありました。達者で暮してゐる、といふ場合に Mi fartas bone. といふし、エス和辭典にも暮すと書いてあるのでおこりやすいまちがひですが、同辭典にも(健康につき)とこゝろつてある通り farti は健康状態をいふ時にだけつかふ語で、生活するといふ意味ではないのです。Mi volas pasigi kelkan t. mpon en k mparo ならばまちがひではありませんが、氣持がびつたりとは来ない様です。しばらくを mallonga tempo とした人がありました。しばらくは必ずしも mal'onga tempo ではありません。かういふ

場合の por は動作の繼續する期間を表すのです。

問 8. よくよく見れば本當は彼女はみにくくないのだ。

答 8. En efektiveco ŝi estas beleta, kiam oni atente rigardas ŝin.

beleta を用ひたのは、彼女のみにくくない事を辯護する積極的な氣持を表す爲です。ne estas malbela としても差支へはありません。Efektive と en efektiveco とは同じ様な意味を持つてゐるのですが、人が Ŝi estas beleta. といふのに同意していふ場合には Efektive ŝi estas beleta. といひ、人は皆 Ŝi estas malbela. といふ場合に反對して辯護し度くしていふ場合には En efektiveco, ŝi estas beleta. の方がいゝといふ位の相違を感じませんか。

問 9. さうとは限らないと私は思ひます。

答 9. Ŝajnas al mi, ke oni povas havi ankaŭ alian opinion.

Mi pensas, ke tio ne ĉiam estas prava.

Mi ne pensas, ke ĝi estas nepre tia.

Mi opinias, ke tio ne ĉiam estas tiel.

Mi dubas ĝian neprecon. かういふ風に答案をならべて見るにそれぞれにおもしろみがあります。比較して味つて見て下さい。わざと批評をしないで置きます。

問 10. 彼はふと自分の若かつた時の事を思ひました。

答 10. Pretervole li ekpensis pri sia forpasinta juneco.

ふとの譯が okaze, hazarde, subite といろいろありましたが hazarde が最多数でした。場合によつてどれもいゝでせうがこの場合は Pretervole がびつたり来ないでせうか。思つたはこの場合 rememoris でもいゝのです。若かつた時といふのを sia juna tempo とかいた人が幾人もありましたが、tempo には juna も maljuna もあり得ません。nova と malnova はありますが juneco は若さといふ意味にも用ひられますが又青年時代、即ち若い時といふ意味に用ひられます。若かつた時即ち過ぎ去つた青年時代は forpasinta juneco.

萬國大會の活況

小坂 狷 二

七月三十日(續) 午後 Petri-lernejo でザメンホフ、その墓場、ノールウエー、ウキーン等の活動寫眞がある。ホテルにかへりタクシードに着かへ 21 時 タクシで中世紀の建物たる Artushof にゆく。當市 senato の招待會である。Ŝtata Prezidanto D-ro Sahm の挨拶 (Kreuz がエス譯)、大會會頭 Aeltermann (氏は supera urba sekretario) が之に應へる。Privat 淺田博士の演説がある。淺田さんはその演説中令夫人を起立させられたので、さては『日本では夫が演説をする間妻は立つてゐるのが古來の習慣である』と早合點をして大會中急に日本通になつた者が多い。十時ごろすんだのですぐ Danziger Hof で催されてゐる kavaredo にゆく。吾が Dora こゝ F-ino Wegener が待つてゐる。卓を共にして ŝaŭm-vino を抜いて dancoj を見る。一年半も米國に居る間 danco の御稽古をする暇がなかつたのは遺憾。長谷川君、瀬川君なども来る。kavaredo がすんで下へ下りてのむ。ブリヴァー、エングアインシタインなどもゐる。更にポーランドの若い連中と一緒にカフェーへ行きホテルに歸つたのは二時ごろであつたらう。

三十一日(日曜日)。色々な宗旨の diservoj が各寺院である筈であるが興味がないので行かぬ。Schützenhaus に集つて汽車で約三十分國境を越えてポーランドの Gdynia 港にゆく。ポーランドは良港 Danzig を召し上げられたので港がない。仕方がないのでこの Gdynia に築港を始めたので工事半である。ポーランド政府のすゝめで約二三十人見物に招待されたのである。とても熱い中を歩かせられ、港の當局から晝食によばれ、例により一さしやべりやらせられる。午後の汽車で Zoppot に歸る。例の Grundo kaj placo Esperanto の inaŭguro を兼ねて kverko の紀念植樹があるのだが遅れたために式に間にあはず。丁度各國各地の代表が各地から持つて來た土を kverko の根元に投げかけてゐる。淺田氏のおすゝめによつて吾輩が日本の土をまくことになつたが勿論日本からは土を持つて來てゐない。手近の土をこつそりと掬ひ取りそこは茶目の本領を發揮して…… Jen mi ĵetas japanan teron…… Vivu, kresku…… kaj floru! (但し kverko には花があるかないか

は吾輩は勿論植物學者でないから知らない。Danzig にかへる。夜 Schützenhaus で Jubilea Festvespero の會合。Aeltermann の挨拶で始まり Nylen, Setälä, ロシヤ代表 Drezen, S-ino Isbrücker, Privat 等の演説あり、市役所有志の組織する合唱團の合唱があり、K. R. の會で問題に出た Viena Kongreso の缺損への monkollektio がある。

八月一日。朝 Teknika Altlernejo の Somera Universitato で Schmidt 博士の地球磁氣。D-ro Bujwid の Unuecigo en Kampoj de Higieno の講義を聴く。晝 Schützenhaus の裏で紀念撮影。

14 時 15 分から Parlamenta Domo (Volkstag) で Publika kunsido de I.C.K. (Internacia Centra Komitato) kun K.R. kaj U.E.A. があり。Privat 司會。吾輩も日本 K.R. 進藤君の代理として高い所へ座らせられる。明後年の大會の invito で云ひあふ。Berlin (1930), Budapest, Pozen, Madrid, Milwaukee (米國) などが引つぱり合つた揚句 1929 年の大會は Budapest とし、なほ來年度に決定的にきめることとなり、十五分休憩。再開 Radio-propagando の報告あり、17 時 10 分閉會。17 時 30 分から Alta Komisararo de la Ligo de Nacioj S-ro van Hamel の招待會があつたが日本の若い連中は bojkoti することにした。それはこの招待は大會出席者全部に來るのではなく eminentaj (?) personoj のみに來るのである。吾々には皆招待狀が來たのだが大會の vic-prezidanto たる大石氏に來ない。大會の vic-prezidantoj 連にはこう云ふ招待は必ず來る先例である。吾等出席の日本人が vic-prezidanto として推戴した eminenta maljuna esperantisto 大石氏によこさぬさはけしからぬと、何分連日のつかれで少々興フンしてゐる際であり、片々フンガイして bojkoti をやることに申し合せた次第である(前々日の Senato には淺田氏夫妻と吾等だけ招待、後であつた Pola Komisararo の招待會には吾々日本人全部に招待が來たが大石氏には來なかつた)。

夜、Schützenhaus に於ける Internia Festvespero. Naciaj kostumoj 着用のこと云ふのだが、日本服ざらひな吾輩持合せは勿論ないのでタキシードで出る。瀬川君は黒の紋付

リウたるこしらへでやつて来る。Dora さんが姉さんと兄さんとを連れて来て卓を共にする。兄さんは廿歳位の青年でエスペラント反對であつたが實地の活用を見たので賛成したらしい。姉さんは英語がお得意でこれは物にならぬ様だ。然し Dora にヨーロッパの Esp. の連中はいけない人があるが日本のエスペランチストは皆立派な紳士だからお友達になつてもよいと云つたそうだ。ダンスが始まる。當地エスペラント運動の草わけて皆から Esp. avino として敬愛されてゐる八十六歳の S-ino Tuschinska の手をさつて Majstro の令弟たる 温厚篤實な D-ro Felix Zamenhof がおどつたので満場の喝采を買ひ、emocia sensacio の sceno を見せた。Glück が世話人となつて Internacia Kostumbalo が始まる。吾輩も Lippmann 其他と共に juĝistoj に撰ばれる。國さまざまな服裝を身につけ樂隊の音につれて会場中央の廣場をれり歩く。中々美事である。何と云つても浅田夫人の日本服が他とは段ちがひの觀があり、正に場を壓する。誰かが吾輩の肩を叩いて S-ro juĝisto, mi jam scias, kiun vi elektos! と云つたのは理である。婦人の部では異論なく浅田夫人が一等、二番は Praha の Chocholkova 嬢、三番もチェック女。男子では一等 Bulgarujo の Tričkov 氏、二等には日本服の瀬川氏と云ふのであつたが、同氏にはまことに御氣の毒であつたが日本から二人も入賞を出してはと吾輩が云つたのでスカンジナビヤに賞が落ちた。大喝采裡に賞品の授與が行はれた。

二日。十時十分から Aŭlo de Teknika Altlernejo で Dua Laborkunsido. Privat 司會。Lingva Komitato kaj Akademio の報告。Privat の『發音の統一に就て』と云ふ講演があり、討論が始まる。實は landnoma sufikso “-i-” に就て U.E.A. 及び Privat をさつちめる機會をねらつてゐたが何分にも今迄の會合は皆 oficialaj salutoj aŭ raportoj のみだから一寸喧嘩をふつかけるには不向、丁度よい機會だと隣に居た長谷川に『やつつけようか』と云へば『よからう』と來た。スツと右手をあげる。司會席の Privat がそれとは知らず “S-ro Ossaka” と呼ぶ。よし來たと壇上に登つて『Privat 博士の云ふ如く發音の統一は甚だ必要なことである。エスペラントにはなほ日本人にむつかしい發音もあるが日本の同志は一生懸命で之を正しく發音する様に學ぶ。然るに歐洲のエスペランチストは随分不注意なのが居る。此の大會にも日本人よりもよつ

ほど發音の下手な無茶なエスペランチストに多勢出あつた』と先づ満場を笑はせて置いて『さて發音の統一も必要だが語法文法上の統一も必要である。例へば landnomo の如き』と本文へ切り込んでだいふ手痛く攻撃し『本大會はエスペラント普及史をかざるに足る大成功で吾々は準備委員に深謝する。然し遺憾乍ら千歳に消えぬ一大汚點を残した。それは本大會の kongreslibro 第何ページにある U. E. A. の報告で、Fundamento を無視し -ujo の代りに國名が -io になつてゐる……然し諸君御安心下さい。過日 K. R. の會議の節 Privat 博士は U.E.A. はもう -io を使ふのをやめたと公言された』例によつて一氣呵成にまくし立て、さつさと壇を下る。Privat は本來日本のエスペランチストを煙たがつてゐたのだが、そこは策士『小坂君の云ふ所も尤だが、U. E. A. は landnoma sufikso -i- の使用はやめたのだが、Germanio, Bulgario 等は internaciaj vortoj として用ひてゐるのでこれは Plena Gramatiko §15 によつたわけで決して kontraŭfundamenta ではない』と辯解する。實はさう來るだろうと思つてゐたこととて、待つてゐましたさばかりに再び手をあげる。“S-ro Ossaka” と聲がかゝつたのでまたもや壇上へのこのこ上つて行つた。

和文エス譯課題

〔七月十日締切——八月號發表〕

1. 何もくらべるものがない程きれいでした。
2. 壁の上に立派な金條の額に入つた繪が掛けてありました。それは風景畫でした。
3. 少し間を置いて彼女はやつこの事でいつた。
4. 銀色の小魚が時々水からはれ上りました。
5. 四方八方からやつつけられるのは目に見えた話だ。
6. あの方へこそかけていたゞき度いのですが。
7. あいつが怒るだけの事を君はやつたのだ。
8. そんなにほめていたゞいてはいたみ入ります。
9. それは人が想像し得る限りの最美しい織物であつた。
10. そんな事を口からすべらすものではない。

話 緑 蔭 緑

川 崎 直 一

二つの傳記 緑の木の下に降りそぐ静かな雨を聞きながら、土岐さんの『緑星巡禮』を讀んでいるうちに、私の思ひはいつのまにか Privat の *Vivo de Zamenhof* に移っていた。

.....Amo venis inter ili. Unu ta on li konfesis al ŝi siajn du sekretojn. Ŝi komprenis, kaj decidis partopreni lian vivon de sindono. (p. 75)

1914 年の Paris 大會で Homaranoj の會をやろうとして斷られた時

Denove korvundita, sed ĉiam ne ofendema, Zamenhof komprenis. Sed je kio do utilis la Krakova eksigo? Ĉu nur la morto igos lin libera disvastigi sian plenan penson? (p. 180) 前者の komprenis を讀んだ時には、えんだ私は後者の komprenis の時には涙が出そうになつた。

何さんが極東エスペラント書院をおこして盛んに本をさりよせていられた時であつた。まだかまだかさ待ちに待つたこの本が僅か數部到着した。一切の事を捨て、一心不乱に讀みふけた後の ekscitiĝo! この本の餘白に La 2an de Marto '21 Morgaŭa tago de la naskiĝo de S-ro Paco Ossaka と書いてある。Privat のやる事の中には感心の出来ない事もあるが、この *Vivo de Zamenhof* は私の机上を去る事の出来ない愛讀書である。

自分の感激を詩的につずつた Privat の本にくらべて Merchant の *Joseph Rhodes kaj la Fruaj Tagoj de Esperanto en Anglujo* はこの尊敬すべきイギリスの pioniro の生涯を事こまかく寫し出してゐる。あまりに材料が多すぎるが、それらは決して我々を飽かす事なく、却つていろんな事實を知る事ができて面白い。

.....Tio estis dum la Liverpool'a Kongreso, kiam mi vidis lin (Phodes) en la Akceptejo. Li portis la ĉiaman "Inverness" surtuton, kiu estis parto kaj esencaĵo de lia personeco, kaj malmolan feltan ĉapelon, ĉirkaŭ kiu li estis metinta verdan rubandon kun la presita vorto "Esperanto." Mi kulpiĝis je la impertinentaĵo peti, ke li deprenu la rubandon, kiel ne taŭgan por lia alta rango de eminentulo

de la Movado. Li evidente estis ĉagrenita, kaj mi vane penis pacigi lin. Feliĉe por mi, S-ro Phodes subaŭskultis nian interparolon, kaj ŝi venis al mia subteno, dirante ke tiaj helpoj al propagando devus esti lasitaj al la pli junaj kaj malpli konataj kongresanoj. Fine, dirante ke li neniam forigos la rubandon, li forigis ĝin. (p. 135)

『あなたのようなえらい人は星をつけない方がよい』なんか實に英國式である。そしてこれに對した Phodes の態度も愉快だ、この外いろいろ Esp. 運動の anecdoto がごつさりのつてゐる。例へば Brita Esperantista Asocio の創立の時の unua malfacilaĵo は la demando pri taŭga nomo por la proponita Asocioであつて La skotoj ne aprobis en tiu rilato la vorton "Angla", kaj la Usonanoj ne volis konsenti pri "Brita", sed proponis "Angleparolanta Esperanta Asocio." だつたそうである。 (p. 35)

エスペラント運動にあらはれた國民性 社會運動にすら國民性が認められるそうであるが、Esp. 運動にもこれがあるように思はれる。イギリスのやり方は堅實である。Brita Esperantista Asocio をもりたて、少なくとも表面は一糸亂れない結束振りである。British Esperantisto とゆうすこぶる面白くない雑誌をいつも同じ體裁で出してゐる。そして出版物も實用的な Millidge の *Esperanto* か、Cox の *Commentary* か。熱し易くさめ易い、ほめて言へば自己の信ずる理想に忠實で、生ぬるい妥協を排するフランスは、雑誌の名が變わる、編輯者が變わる、形が大きくなつたり小さくなつたり、戦前は世界の指導者でありながら戦後は火の消えたよう、僅かに Akademio を占領している位が目だけ。ドイツを知らうと思へば Wüster の *Enciklopedio* を見よ。Originaleco は少く、多少獨斷的だが材料をリンと集めて、系統的に排列してゐる。それから案外研究的な雑誌が *Amerika Esperantisto*, Zamenhof の手紙集をのせた事もある。これは周圍が Esp. なんか相手にしないので、却つて少數の人が眞面目にやつてゐるからであるらしい。

つ み 菜 集

10. 日露戦争

『日露戦争』と云へば日本『國』とロシア『國』との戦争と思ふのが日本人の觀念であるが、理窟で云へば地理的の無生物たる國と國とが戦争するのではなくて、人と人との戦争、即ちロシア『人』と日本『人』との戦争であるから Ruso-japana milito である。

何々「エスペラント會」は esperantistoj の集團であるから…… Esperantista Societo とするのが普通である。『日本エスペラント協會』は Japana Esperantista Asocio, 『横須賀エスペラント支部會』は Jokoska Esperantista Societo と稱してゐた。但しエスペラント『語』に関連する團體の意なら Japana Esperanto-Instituto, Universala Esperanto-Asocio などとしてよろしい。その時には streketo を Esperanto の次に挿入すべきである。

『エスペラント運動』史なども日本人ならば historio de Esperanta movado とやり勝ちだが、歐米人は historio de Esperantista movado と書くのが普通である。

『日本の習慣』も日本『國』(地理上の)の習慣ではなくて日本『人』の習慣のこゝだから japanaj kutimoj 又は kutimoj de japanoj であつて kutimoj de Japanujo ではない。『日本の大使』も日本國民の代表で同様 japana ambasadoro, 『日本語』=日本人の言語 japana lingvo, 『日本文學』=日本人の文學 japana literaturo など皆然りである。

これ即ち Japano が「日本人」の意であつて Li parolas japanne (彼は日本人的に話す)が『日本語』で話す意となる所以である。

11. Nipono, Nihono

エスペラントでは上記の principio 即ち民族を基礎とする方式をあくまで徹底させて國名及び國民名を呼ぶ次第である。即ちある民族があつて地理的の國を成す場合には先づ民族に名を與へて然る後その民族名からその國名を作る。英語獨逸語で Japan は日本『國』の意であるがエスペラントでは日本『人』の意である。そして日本『國』は人間たる japano

の ujo であるとして Japanujo とする。Germanujo, Francujo, Anglujo, Kimrujo など然り。然るに新大陸の如き土地が先にあつてそこへ民族(多くは數種の民族)が移り住んで國を成したものは先づ地理的な國名を先に採つてその國の『住民』(民族でない)の名を -an- で作る。Peruo, Peruano など。

十年程前の日本エスペラント大會に内田中佐が japano は外國名であるからよろしく『ニッポン』を採用すべしと云ふ提案を出された。然しエスペラントの principio では日本民族なるものが嚴として存在する限りは Nipon は國名ではなくて民族名とせねばならぬ。例へば Mi estas Nipono, ili estas ankaŭ Niponoj など云はねばならぬので、これでは日本語の習慣から見て甚だ tikla である、且つ『日本』なる名稱も眞の日本語ではなくて漢語即ち外國語から取つた外來語に過ぎない。従つて Nipono (Nippono は Esperanta ortografio の上から不可)とすべきか Nihono とすべきかもきまらない(漢語で純日本語でない爲)有様である……と云ふ結論になつて内田氏も了承提案を撤回された。

將來各民族の民族心が全く失せて世界の各『部分』が全く地理的に呼ばれる時代が來たらばいざ知らず今日の處では民族名によつて國を呼ぶのが至當である。日本語として日本を『ニッポン』『ニホン』『ヒノモト』『ヤマト』など呼ぶのはよろしいが、エスペラントとしては既に習慣的にきまつた形 japano を變へる必要はない。(最初は japono と japano との二つの形があつたがちきに japano の方が多く使はれるようになり、今日では萬人が japano を用ひるようになった)。何もフキンランドを Suomi, 支那人のことを Ĉunghuamino など今更唱へ出す必要もあるまい。

12. Koreujo

朝鮮人は太古はいざ知らず今日ではその言語も習慣も日本民族とはだいぶちがつて來てゐること故 koreo は民族名たる『朝鮮人』、そして『朝鮮』は Koreujo と呼ぶが至當である。

新 刊 紹 介

【BIBLIOGRAFIO】

堀 眞 道

★ILLUSTRITA BIBLIOTEKO, serio 1: Oriento. La tuta serio (5 numeroj) kune kostas rmk. 2.—(sv. fk. 2.50): duontole bindita en unu volumo rmk. 3.60 (sv. fk. 4.50). Unuopaj numeroj kostas po rmk. 0.50 (sv. fk. 0.65), ilustrita de Ise Hofmann, titola bildo de I. Dücker, eld. de Heroldo de E-to, Horrem b. Köln, Germanujo, 1927.

N-roj 1/2. DEVI ANGRENĤ, kaj MAK MIAH, de P. W. vanden Broek, de la rakontoj el Javo originale en E-to, 13×20 cm., p. 64.

N-roj 3. RIBELEMAJ VIRINOJ (UAN CAŬ ĈIN), de M. Ĉ. Kuo, moderna ĥina dramo en du aktoj, el ĥina lingvo trad. Ŝ. M. Chun, 13×20 cm., p. 32.

N-roj 4. SAKUNTALA, de Kalidesa, rakontoj el la antikva Hindujo, laŭ la konata dramo de la fama ĥinda poeto, 13×20 cm., p. 40.

N-roj 5. MIL KAJ UNU NOKTOJ, kelkaj rakontoj el la mondfama araba kolekto postrakontitaj en E-to. 13×20 cm., p. 32.

新しく出た『繪入叢書』第一編東洋の部で全五冊より成り合本もあり一冊賣もする。第一、二巻は瓜哇に三十年も居た著者が同地の物語をエス語で書いたもので、第一のは同島内に四國對立時代の王子の戀物語で瓜哇人の宿命觀を描いたもの。第二のは同島の開拓者英人 Charles Johnson と島の女との結婚が島人の迷信より破滅に終るといふ悲劇で『瓜哇の三浦安針』といふところであらう。第三巻は支那近代作家の著書が支那婦人が似而非道德の桎梏より脱せんとする惱みを描いたもの。王の氣に入りの貪慾な畫家が王に推薦す

る宮女の姿繪を賄賂を取つて美醜を加減して居たが一宮女が金のない爲め非常な醜女として姿繪を獻上されて遂に匈奴王への貢物として蕃地に送られることになる。畫家の娘が之を救はんとして父に嘆願するが容れられず。宮女の母は悶死する。王は宮女が絶世の美人であることを知り姿繪の偽計を感知し其宮女を手に入れようとするが母の死により大悟した宮女は王の袖を振り切つて匈奴の地に赴くといふ筋。大詰で宮女が王に向つて男性の暴虐を罵り、大見得を切るあたりがヤマであらう。これは有名な後漢の元帝の朝における王昭君の故事を脚色したもの。第四巻は印度詩人で有名な Kalidasa の劇の筋を物語に書いたもの。王が狩に出て聖者の尼院を訪れて神の申し子である美女 Sakuntala を垣間見て戀を語らふ。別れる時の記念に指環を與へて去るが宮庭に歸るさすつかり記憶から去つて居たが程經て美女は王宮を訪れて身重になつたと訴へて王に會つたが紀念の指環を河中に落したので王は戀の記憶を呼起すことが出来ない。美女は宮殿を追はれて恨みの生活を送る。數年を経て漁夫の網に掛つた彼の指環が王の手に届いて王は自己の無情を悔ひ草を分けて美女の行方を探す中一日帝王の手相を備へた稀代の童子に行き會ひ其母を探れるさまぎれもない彼女であつたので覆水盆に歸るといふ筋で此も日本の話にありそうなもの。皆東洋種だけに我々には興味があるものばかりである。第五巻は有名な『アラビヤンナイト』より『砂漠の王タドモラ』『アブル、ハサン、アルカリ』の二編を選んで筋を書いたもので巻頭に千一夜物語の發端が載せてある。

163頁 (エス語放送週報の續き)

時 分

21.30 トゥールーズ〔佛〕

(エス語講座、15分間)

22.15 プレスラウ; グライウィッツ〔獨〕

(エス語講演 10分間。四月中は『獨逸文學に就いて』)

【土 曜 日】

18.20 プレスラウ; グライウィッツ〔獨〕

(エス語講座)

18.55 ケーニッヒスベルヒ〔獨〕

(次週プログラマーの放送、5-10分間)

18.55 ダンツィツヒ〔自由市〕

(次週プログラマーの放送、5-10分間)

22.00 レニングラード〔露〕

22.30 モスコー〔露〕

(次週プログラマーの放送、30分間)

【毎 日】

11.45 ライプツヒ; ドレスデン〔獨〕

(天氣豫報、5分間)

【毎月一日と十五日】

21.30 セヴィラ〔西班牙〕

(同國語でエス語運動報道)

REKTE AL LA CELO

【眞直に目的へ】

de Seisensui Ogiwara

tradukis Macue Sasaki.

是は私の親しい或禪宗の坊さんと茶を飲みながらの笑ひ話である。其人が下駄屋に寄つて、「一番上等の爪革をくれないか」といふと取出されたのは本鰐革さて七圓もするのだつた、内心に驚いたが、初め云つた言葉もあるので高いとは云はれず、「之よりもつと上等はないのか、ではやめよう」と云つて出て来たさうな。其人が往來を歩るいてゐるさ、巡查が前に来て「おい、何故左側をあるかんか、馬鹿」と大喝して肩を掴んだ。其人は「うんさうか」と云つて其場で廻れ右をして、ぐんぐん歩るいたさうな。後ろに行けば、即ち左側になるからである。其機轉は面白い。もちろん、是は笑ひ話である。禪宗の話ではない。けれども、此話から逆に考へさせられる所がなくもない。若し其下駄屋で、もつと上等な爪革を出された時にはどうするか。いや其は恥をかきだけでいいとしても、巡查の鼻をあかしたといふ事、自分は負けないといふ事にいい氣持になりすぎて、東に行くべき所を西へ向つて、遂には何處までも西へ行つてしまつたらばどうだらうか。世間には實際、勝つて、自我を通したが爲に、邪道と氣付いても、體面から、行掛りから引返へすことの出来ない人が案外に多い。私達は、たまへ馬鹿と云はれても頬を打たれたとしても、其爲に自分の行くべき方向を曲げてはならない。

——井泉水

Mia intima amiko, bonzo de Zen sekto, iaokaze babilis duonŝerce, kiam ni sidis super teo: Li iam eniris vendejon de lignoŝuoj, kaj petis por “la plej bonaj kotŝirmiloj.” Oni montris al li paron el malfalsa krokodila ledο, kaj 7 spesmilojn ĝi kostis! Li sekrete surpriziĝis, sed pro siaj antaŭaj vortoj ne povis diri ke ĝi estas tro kara. Sekve li diris “Vi ne havas pli bonan? Mi do ne prenos,” kaj eliris. La sama homo iam marŝis sur strato, kiam policisto kontraŭvenis al li, kaj kaptante lin ĉe la ŝultro, kriegis “Hej, kial ne marŝas en la maldekstra flanko, malsaĝulo?” “Ĉu vere?” li simple diris kaj sin turninte tuj marŝis en la direkto en kiu li venis: la turniĝo kompreneble lokis lin sur la maldekstra flanko. Lia sprito estas amuza. (Tiu ĉi ne estas tiel nomata instrua parolo de Zen sekto, sed simpla babilado.) Tamen de alia vidpunkto tiu ĉi rakonto ne malmulte enpensigas nin. Kion li povus fari, se la vendisto elmontrus al li pli bonkvalitan? Tio ja eble ne kaŭzus al li pli ol ian embarason. Sed tamen, se li fariĝus tro feliĉa en la penso ke li moke mirigis la policiston, kaj ke li ne malvenkis, kaj pro tio li irus ĉiam pli okcidenten dum lia celita loko kuŝis oriente, kio fariĝus al li? En la mondo troviĝas multaj homoj kiujn, ĝuste pro tio ke ili venkis kaj sukcese agis laŭ sia volo, tiu ŝajna honoro kaj cirkonstanco ne ebligas returneniri, kvankam ili jam konsciiĝas pri sia erara iro. Eĉ se oni insultus nin malsaĝuloj, aŭ eĉ batus nin sur la vangon, ni neniam pro tio devas ŝanĝi nian celitan vojon.

sian grandan korpon sur min—mi ekkonis lian nomon laŭ subparoloj de japanaj kelneroj. Oni konas lin pli bone kiel mondefaman poeton, ol kiel politikulon; tiom pli al mi estis granda la fiero, ke mi povis konatiĝi kun lia korpo. Post interparolo de dekelkaj minutoj kun du-tri samlandanoj, li tuj foriris. Tial neniom mi komprenis el liaj fremdaj vortoj, sed kiam liaj karnoj, pli varmaj ol tiuj de ordinalulo, moviĝis en tiu kaj alia maniero laŭ la gestoj nevideblaj por mi, la ondoj de lia korpo kvazaŭ flustris al mi per sia tiklanta tuŝento. Kiel supernaturan inspiron tiam mi ricevis! Pretervole mi tiam ekimagis al mi mem, kiel rezultus, se nun mi donus al li en la koron, enpikon de akra pardo tra la ledro de la seĝo. Kompreneble, fatalan vundon tio kaŭzus al li—li jam neniam povos restariĝi. Ne nur en lia patrolando, sed ankaŭ en Japanujo ĉe ŝtatistoj tio donus grandan tumulton! Kian sensacian raporton skribus la ĵurnaloj? Tio venos simple de mia enpiko, kio elvokos la plej grandan efekton super la rilato diplomatia inter ambaŭ nacioj; kaj samtempe sur la vidpunkto de artoj, lia morto devus signifi grandan malprofiton de la tuta mondo. Per unu ĵeto de mia mano, ja mi povus efektiviĝi tian grandiozan scenon. Vi facile vidas, kiel mi ne povis min helpi por dispeli la atakon de la mistera memfiero en la fantazio.

Jen unu alia sperto, kio al mi okazis kun iu fame konata dancistino el certa eksterlando; kiu hazarde

noktis en mia hotelo, kaj nur unu fojon ŝi sidiĝis sur min. Granda kaj forta estis la impresoj ankaŭ ĉifoje, same kiel kun la ambasadoro; ŝi al mi donis ritmon de ideala korpa beleco, kian ĝis tiam mi neniam ankorau renkontis. Tiu troa beleco, tute forportis min, sen ia volupta deziro, kaj igis min tiom respektive ŝin adori, kiel se mi estus antaŭ majstra belartajo.

Krome, mi havas ankorojn multe da diversaj travivaĵoj, kuriozaj, misteraj, aŭ travibrantaj; sed, ĉar mi ne celas en tiu ĉi letero raporti iliajn detalojn, kaj ĉar, ĝi jam tro longiĝis, mi volas rekte rapidi al la grava punkto de la rakonto.

Unu ŝanĝiĝo okazis kun mi, kelkajn monatojn post mia alveno al la hotelo: la posedantoj de la hotelo pro ia kaŭzo decidis foriri al sia patrolando, kaj vendis la hotelon kun ĝia tuta meblaro al iu japana kompanio. La lasta tiam projektis pli profitdonan manieron de administrado, ŝanĝante la antaŭan luksan aranĝon, kaj igis la hotelon multe pli populara. Por aŭkie forvendi la meblojn, kiuj ne taŭgis por la nova administrado, oni komisiis la aferon al iu granda meblovendejo. Ankaŭ mia seĝo troviĝis sur la listo de la vendotaĵoj.

Kiam mi eksciis tion, en la daŭro de kelka tempo io forrabis de mi ĉiujn fortojn, tiom ke mi ekintencis denove min retiri en la homan mondon okaze de tiu cirkonstanco, kaj reviviĝi sur la nova vivvojo. La ŝtelita mono sumiĝis jam sufiĉe multe; tiam mi povus

ne fali en tian mizeran vivon kiel antaŭe, eĉ se mi min estus ŝovinta en la seriozan socion. Sed kiam mi repensis, io luma ankoraŭ restis tie. Unuflanke adiaŭo al la fremdula hotelo devis esti granda malespero por mi, sed tamen ĝi signifis novan esperon. Por diri plue, spite tio, ke mi havis okazojn amikiĝi kun tiel diversaj aliseksuloj daŭre de kelkaj monatoj, kaj kiom ajn ili posedis amindajn korpojn, mi ĉiam sentis min iel nekontentigita; nur tial, ke ĉiuj tiuj kunulinoj ĉiam estis alirasuloj. Ĉu ne estas nature, ke japano amu japaninon, se li deziras akiri veran amon? Iom pli kaj pli, mi emis tiel pensi, kaj ĝuste tiam oni lasis mian seĝon sur la liston de la aŭkcio. Ke mia seĝo estu aĉetita de iu japano, ke li metu ĝin en japana hejmo, iaokaze povos efektiviĝi. Do mia nova espero estis en tio, kaj mi decidis, malgraŭ ĉio iom plue daŭrigi mian vivon enseĝan.

Du-tri tagojn mi suferadis tre malfacilan cirkonstancan ĉe la magazeno de l' meblovendejo. Feliĉe, tamen, tuj kiam oni komencis aŭkcii, unu aĉetis mian seĝon. Pro la bona kvalito de la seĝo, mi kuraĝas diri, ĝi povis, se ne nova, altiri sur sin la okulojn de la homoj.

La aĉetinto estis oficisto, loĝanta en granda urbo, kiu troviĝas proksime de la urbo Y. Survoje al lia domo, kelkajn kilometrojn for de la vendejo, mi estis transportita per ŝarĝa aŭtomobilo, kiu tiel furioze tremegadis ke en la seĝo mi kvazaŭ suferis dolorojn de la agonio.

—Venu dekomble pli da doloroj, tamen mi ankoraŭ restus ĝoja, ĉar mia aĉetinto estis japano kiel mi kore esperadis.

La oficisto, mia nova mastro, posedis sufiĉe grandiozan domegon, en kies grandan kabineton oni metis mian seĝon. Pli ofte ol la mastro mem, la bela kaj juna sinjorino de la domo okupis tiun ĉambron; des pli kontenta mi fariĝis. Deposte, ĉirkaŭ unu monato, mi vivis tage-nokte kune kun tiu sinjorino. Escepte de la tempo de manĝo kaj dormo, ŝia eleganta talio ĉiam sin apogadis kontraŭ mi, ĉar tiam la tutan tempon ŝi sin fordonadis al ia verko, en tiu ĉi kabineto.

Estas tute superflue priskribi, kiel akorde mia koro batis kun la ŝia. Ja ŝi estis mia unua japanino,....Ŝi havis tute ensorĉajn karnomasojn. La veran amon nun povis mi eksenti por la unua fojo en tiu ĉi vivo! Kompare al ĝi la multaj spertoj en la hotelo estis preskaŭ senseucaĵoj. Ili ne indas je la nomo de amo. Tion vi klare vidas,—certa mi estas pri tio—ĉar malgraŭ ke neniam antaŭe mi sentis tian deziron, min forte allogis la deziro sciigi tiun sinjorinon pri mia ekzistado. Neeble jam fariĝis por mi silentadi, deteni min nur en amuziĝo miaflanke sola, je la sekreta karesado....

Tio estis mia deziro, ke ŝi siaflanke ankaŭ volu kontiigi pri mia ekzisto en la fotelo. Mi ĝisiris eĉ pensi, ke mi estu amata ankaŭ de la sinjorino! Jam mi ne povis resti hezitema. Kiel tamen povus mi sendi signon

al ŝi? Ĉu mi rekte malkovru antaŭ ŝi, ke homo tie kaŝiĝas? Neniel! Tiaokaze ŝi tuj pro timo nepre alvokos la mastron kaj la servistojn. Ĉio nuliĝos kun mi tiam, kaj pli malbone, mi devus suferi leĝan punon sub abomeninda akuzo.

Tial mi ekpenis almenaŭ allogi ŝian kareson sur mian seĝon. Mi igu la seĝon por ŝi, kiel eble plej komforta. Artisto, kiel ŝi estas, sendube estas dotitaj per multe pli delikataj sentoj, ol ordinaruloj. Se vivon aŭ spiriton ŝi trovas en mia seĝo, kaj se ŝi karesos ĝin ne kiel senvivajon, sed kiel unu spiranton, mi estus tiam sufiĉe kontenta.

Ĉiam preta, zorge mi atendis, por akcepti ŝian jetiĝon kiel eble plej mole, plej afable. Kiam laca ŝi restis sur mi, mi tre malrapide—kun zorgema singardo kontraŭ ŝia konsciiĝo—movis miajn genuojn por alipozigi ŝian korpon. Kaj kiam ŝi fine ekdormetis, mi servis por ŝi kiel lulilo, per la genuoj tre ete ŝin balancante.

Ĉu tiu prizorgo estis repagata, aŭ ĉu tio sole estis mia halucinacio, ke lastatempe la sinjorino, iamaniere, ekŝajnis al mi, sentas amon al mia seĝo? Suĉinfano alprenota en la sinon patrinan, aŭ knabino kiu estas ĵus sin jetonta en la ĉirkaŭbrakon de sia amato,—kun tia dolĉa molkoreco, ŝi profunde sidiĝis sur mian seĝon. Kaj kiel amindumanta ŝi ŝajnis, kiam ŝi movas ŝian korpon sur la femuroj miaj?

Tiamaniere, tagon post tago, mia pasia flamo ĉiam

pli doloris en la koro, kaj finfine, ho anĝelino, min ekposedis dezirego, kiu certe devus esti ekster mia nuna stato. Tiel—tiel mi pensas en mi, ke, se povus mi nur unu fojon vidi mian amatinon kaj intersanĝi kelkajn vortojn kun ŝi. Dio forprenu mian vivon—mi volonte adiaŭus al mi mem.

Mia tre estimata sinjorino; mi pensas ke via seĝo jam bone ĉion divenis. Pardonu do, mi petas, mian troan malĝentilon tiel kuraĝe eldiri, “tiu, kiun mi tiel per mia tuta koro amegis, estas Vi.” Mi estas tiu kompatinda viraĉo, kiu tiel longe dediĉadis sian amon certe neniam plenumotan al vi, ho sinjorino, depost kiam sinjoro via edzo aĉetis mian seĝon ĉe tiu meblovendejo en la urbo Y.

Sinjorino; jen mia tutkora peto, mia tutviva peto: ĉu vi bonvolus min renkonti nur por unu fojo? Ĉu vi afable alparolus al tiu ĉi soleca viro malbelaspekta, almenaŭ unu vorton da kompato kaj konsolo dekora? Neniom plu, mi deziras de vi. Tro malbela, tro malpuriĝinta estas mi. Savu min, ho anĝelino; igu ke la peto de ĉi tiel malfeliĉa homo estu konsentata!

La lastan nokton mi eliris el via domo por skribi tiun ĉi leteron. Ĉar vizaĝo al vizaĝo fari ĉi tian peton al vi, estus tre danĝere por mi,—kaj ankaŭ mi neniel povas kolekti tiom da kuraĝo. Kaj kiam vi estos traleginta tiun ĉi leteron, mi eble pala pro maltrankvilo vagados ĉirkaŭ via domo.

Se kompatema vi, bonanime akceptus mian tiel trud-
eman petegon, volu surmeti, mi petas, vian poŝtukon
sur la dianto en la potu ĉe la fenestro de la kabineto.
Per tiu signalo mi povus viziti vin kiel ordinara vizit-
anto, ĉe la vestiblo de via domo.

* * * *

Kaj tiu ĉi letero finiĝis en iaj pasiaj vortoj de preĝo.
Joŝiko, kiam ŝi legis ĝis ĉirkaŭ duono de la letero, jam
tie pro terura antaŭsento, tute paliĝis. Senkonscie ŝi
ekstaris, forkuris el la kabineto, de la timiga fotelego,
—al iu ĉambro de japanstila konstruaĵo. Pli bone...ne
legi, disŝiri kaj forĵeti la leteron, ŝi pensis tie, sed ve,
postlasita parto de la letero naskis en ŝi pli kaj pli da
maltrankvilo tiel ke ŝi fine venkiĝis kaj daŭrigis la
legadon plue, ĉe unu tablo de la ĉambro.

Jes, ŝia antaŭa sento estis ĝuste prava. Ĉu do efek-
tive? Ke fremda viro ĉiufoje fimoŝetis sub mi interne
en la seĝo!? Ho, mia dio! Kiel terure!

Frosto ekkuris sub ŝia haŭto; ŝi tremis per la tuta
korpo—la stranga tremo longe ne ĉesis. Ŝi staris pres-
kaŭ svenante; tro malbone estas la afero. Kiel fari?
Ĉu malkovri la seĝon? Kiel mi povus tion? Minace
estas, ĉar tie devas esti postlasitaj aĵoj, abomenaj, naŭz-
igaj—eĉ se tiu viro forestas.

“Jen letero por vi, sinjorino?”

Surprizite ŝi sin turnis al la voĉo. Tio estis servist-
ino, kiu alportis al ŝi unu leteron, ŝajne ĵus alvenintan.

Senkonscie Joŝiko ĝin akceptis. Nevole ŝi ĵetis la rigardon sur la koverton por malfermi la sigelon. Tiam subite io korfrapis al ŝi, tiel severe, ke la letero falis el ŝiaj manoj. Tie skribiĝis ŝia adreso klarvideble en tiuj samaj literformoj, kiuj staris sur la ĵus legita, terura letero.

Longan tempon ŝi ŝanceliĝis, ĉu ŝi rompu la sigelon aŭ ne; sed finfine ŝi kuraĝis, timeme eklegis la enhavon. La letero estis tre mallonga, sed tamen sur ĝi legiĝis tiaj mirindaj vortoj, kiuj konsternis ŝin ankoraŭfoje. Kiel do?

— „Milfoje mi devas peti de vi pardonon por mia tute abrupta kaj senceremonia letero, kiun mi nun skribas al vi. Mi estas kutima ŝatleganto de viaj ĉiam respektataj verkaĵoj. Tio, kion mi sendis al vi per alia poŝto, estas mia nebona originalaĵo. Al mi estas tre granda honoro, se mi povus vin ĝeni tralegi ĝin kaj ricevi por ĝi vian altan kritikon. Pro ia afero mi poŝtis la manuskripton antaŭ ol mi skribis ĉi tiun leteron. Tial mi pensas, ke vi jam havis la komplezon por legi ĝin. Kiel ĝi al vi plaĉis? Se mia mallerta verketo donus al vi eĉ iometon da intereso, jam granda estus mia ĝojo. De-sur la manuskripto mi intence delasis la titolon, kiu laŭ mia deziro estu “Homa Seĝo” Bonvole pardonu mian maldececon. Kun elkora peto, mi restas.

Tute Via.

— *Fino* —

會員の聲

★濟南出征を前にして名古屋で自刃された歩兵大尉池川氏は我同志の一人である。其遺言書は公表されない。同氏は三年間育榮商業校の軍事教官をつとめ謹嚴溫厚の性格で同僚の敬愛と學生の心服を得てゐた。同氏は静岡在住時代にエス語に縁があつて昨夏東京より來名の同志の歡迎會に始めて出席され引續き毎火曜日例會には正時間に謹嚴な態度で出席された。

暖き家幼き兒と出征の光榮とを放棄して不可思議の死をえられし大尉の死は？

本月初め正文堂へ「何か新しいエス書がきましたか」と訪れられたこの事。又他國なまりで「貴方がたは上手ですな私も終まで出席します」と云はれた言葉が我々の耳に残つてゐる。(中略)

絶對の死。批評する事は恐らく何れにも許されない。併し當市在住の esp-istoj は誰しも同大尉の同志たりし事を報告する義務を感じるであらう。(名古屋 白木欽松)

★私の失敗談を申上ます。之も何かの足しになるかと思つて。去る四月九日京大樂友會館で全國學生エス語雄辯大會が催されました。その會に参加した感想記です。大正15年にも出まして、生れて始めての Paroladeto でさつぱり要領もわからぬまゝに陪審制度に就いて話したのですが、後から考へて見ると「讀む爲の原稿」を讀み上げたまでで、「話す爲の原稿」を話したのではない事を知りました。従つて聞き手にこつては判りにくかつたに違ひなからうと思つたので、今度は最初から話す爲の原稿を作りたいと思つてゐました。題は犯罪。先づ計畫を立てたのですが諸種 of 材料を得るに不可能のため残念ながら問題を變更する必要が起りました。それが八日の事です。そこで「所有權」のはんの skizo を話す事にして「話す爲」の原稿を書き上げたのは九日の晝でした。これが第一失敗の原因だつたのです。もつと早く書き上げたならよかつたのですが旬日に亘る Hemorojda sangado ですつかり身體が衰弱してゐるので (Mistera folio よ效果あれ!) こんな結果に陥つたのです。だが兎に角、話の骨組丈はわかつてゐるので「話すのだ」と云ふ事さへ頭に入れてやれば陪審制度の話の様に失敗もすまいと云ふつもりで演壇に臨んだのです。最初はそのつもりで Antaŭparolo として犯罪に就いての

私の計畫を話しましたが、ついうつかりいらぬ事までしやべりかけて Se vi sciis kiom multe da krimfarantoj ekzistas. と何氣なく云つてしまいました。勿論 Vi eble komprenos ke…… と云ふつもりだつたのですが、全く演説の経験の少い私はすつかりあがつてしまつたのでせうか、その後をつゞける事を抜かしてしまつたのです。話半ばに之に氣付いたので、私の頭は拾收する事の出来ない混亂状態に陥りました。それで所有權の話をする時には原稿に頼る事にしてしまつたのですが、それならそれで落着いてやればよいものをあがつてしまつた私はもはやどうする事も出來ず、「頭で話す」事なんか思ひも及ばず原稿を讀み上げる位しか頭が働かなくなりました。まだ原稿丈でも讀みあげればよかつたのですがつひにそれも邪覺くさくなつて、此處も不必要だ、これも云はなくてもわかつてゐると思ふと折角書き上げた原稿を全く無視して結論にのみ急ぎ、結局何の話やら我ながら解らぬ Frenezulema な sonado になつてしまつたのです。後から考へると抜けたのは仕方がないからそのまゝにして、尙後も原稿を出さずに平氣で續けて行けばよかつたのですが、一旦原稿を出すとそれを見なければ全く頭に自信が置けなくなつてこんな仕末になつたのです。以上全く私自身の辯解となりましたが、これが他山の石ともなればと思つて長々しく書いた次第です。

(Joŝio Satoo)

★Karaj Kolegoj Kunbatalantoj—Niaj antaŭuloj longe laboradis sur la dorna vojo por venigi la sopiratan paceman tagiĝon. Tamen ankoraŭ daŭras la dorna vojo, kaj do ni devas paciencoj kaj obstine devas pluen iri ĝis ni akiros la finan venkon. Tiun ĉi vojon ĉiam regas lumeco, kiu nin kondukas al la hela tagmezo paŝon post paŝo. Do al ni estas nature ke nia rondo agrabliĝas ĉiam pli kaj pli. Tiuj ĉi ne estas sinflatantaj vortoj. Samideana amikeco kaj konkordo kaj modesteco estas niaj devizoj. Kaj tial se en nia rondo ne ekzistus tia amikeco, nia penado por Esperanto plimalgrandigus ĝian rikolton kaj pliprokrastigus la alvenon de l' tagmezo, eĉ se nia penado estus treege energia kaj forta.

Ni peni pliagrabligi nian rondon. Vidu kial iuj, kiuj perdis la ardecon al Esperanto, ankoraŭ restas en nia rondo, ne havante la kuragon forlasi nian rondon! La kaŭzo estas nenio alia ol la fakto ke en nia rondo sin trovas tia agrableco, kiu naskas inter ni ĉiuj reciprokan amikecon. (長野縣 T. Moriizumi)

財團法人日本エスペラント學會寄附行爲内規に就き 財團法人日本エスペラント學會維持員會々則

既報の如く本年四月の大阪での日本エス大會で決定された(五月號137頁參照)我が財團法人日本エスペラント學會寄附行爲の内規及び財團法人日本エスペラント學會維持員會會則は去る五月十七日の學會役員會に再議して最後の決定(右大會できまつたものゝ字句を二三修正したにすぎなかつた)をえましたから次頁へ發表致しました。御熟覽下さい。尙こゝに二三これについて説明を申上ます。

右の内第一の寄附行爲内規は學會が法人となつた時作らるべくして往昔今日までその儘になつてゐたものですがこれは從來學會が法人でない時代の會則に既に規定されてゐたもので法人となつて後もこれを習慣的に(不文法として)守つてきたのです。唯第一條に年額三圓の正維持員を新設した事のみ新しい事ですが之は別項に述べた故説明を省略する。

次に第二の維持員會々則については少しく説明致します。學會が法人となる迄は學會支部と云ふのが方々にありましたが學會が法人となつても支部をつくる事ができるかの問題は今日迄懸案でありましたが便宜上から在來の學會支部が法人となつて後もそのまゝ默認の貌でみさめ研究してをりましたが學會が人を中心とする社團法人でなく財を中心とする財團法人であるがため各地方に支部をおくといふ事が全く事務所の形式でしか出来ない事を認めました。事務所として各地へおくすればやはり登記その他法規上種々の手續を要するものであり又事務所である以上それらの事務費は一切學會自身で賄はねばならないのです。所で學會として到底それらの事務所費を支辨する事は不可能の上事務所と支部とは性質がちがふもので支部設置の要求を満さないものとなるのでいろいろ熟考の結果こゝに新に我財團法人日本エス學會の維持員(所謂會員のこと)が全部で維持員會と云ふものを作りその維持員會の地方支部を全國各地におくことにすると最も好都合である事を認めました。その結果この維持員會は財團法人日本エスペラント學會維持員會(La Societo de la Membroj de Japana Esperanto-Instituto)と命名しその會則として次頁に示す如きものを決定致しました。その會則の第七條に示された總會(Ĝenerala Kunveno)と云ふものは從來學會が法人となるまで日本エスペラント大會毎に開催された日本エス學會總會と同一の

ものです。つまりこの維持員會が生れた結果我學會は財を基礎とする財團法人として強固な財的基礎をもち當局の監督下に確實な歩みをつゞけ一方維持員會と云ふ人間を基礎とする團體と一身同體となつて社團法人的の性質をも名實共に帯びるものとなりました。

所でこの維持員會々則の附則たる「支部ニ關スル規定」は維持員會々則の主眼點でこの規定によつて始めて學會の各地支部が組成されるべきです。從來あつた財團法人日本エス學會——支部といふものは五月限り消滅するものでこゝにこの新しい規定により財團法人日本エス學會維持員會——支部と云ふものを設立すべきでこれが從來の日本エス學會——支部に代るべきものである。雜誌その他の上で我々は一々財團法人日本エスペラント會維持員會——支部と長々しい名前をよぶの煩をさけ日本エス學會——支部とよぶ(エス語の譯名も——Filio de J. E. I. と略稱す)ことにしたいと思ふ。又その支部は一般に對しても財團法人日本エス學會——支部と略稱しても場合によつて差支へない事と思ふ。それは兎に角一般世間からは支部の行動は常に學會の行動として認められ勝故支部の設立は慎重な態度で第13條乃至第20條を嚴重に則つてなされるべき事は言を俟たない。尙この附則につき二、三の疑點と希望を述べれば、(1)本規定第12條の同一地域とは大體「交通機關によりその支部の催す會合に毎回出席可能の地域」を以てし必しも行政區劃によらぬものです。(2)又大都市の如きを小地域に區分せないのを原則とする事。(例へば東京市の如きは市と隣接町村を一つの支部として包含し得るに比し交通機關の便の悪い一僻村でも學會維持員10名以上あればそれ一つで一支部を構成してよい事)(3)學會維持員は強制的にその地方支部員とならなくてもよいが差支へない限り加入の事。(4)大地域を一區域とする所にあつてはその地域内在住の學會維持員總數に比して餘り過少な加入者のみで支部を作つても會長が許可しない事がある事。(5)今學會維持員でないものでも將來學會維持員となる見込のある人々は支部の準會員として包含し得ること。

財團法人日本エスペラント學會寄附行為內規

第一條 本財團寄附行為第十一條ニヨル維持員ヲ分ケテ次ノ五種トスル

- 一、普通維持員 本財團ノ經費トシテ年額金二圓四十錢ヲ寄附スル方
- 二、正維持員 本財團ノ經費トシテ年額金三圓ヲ寄附スル方
- 三、贊助維持員 本財團ノ經費トシテ年額金五圓ヲ寄附スル方
- 四、特別維持員 本財團ノ經費トシテ年額金十圓以上ヲ寄附スル方
- 五、終身維持員 本財團ヘ一時金百圓以上ヲ寄附シタ方

第二條 本財團維持員ハ次ノ特典ヲ有スル

- 一、毎月本財團機關紙『ラ・レヴ・オ・オリエンタ』ノ無料配布ヲウケル

二、エスペラント研究普及及ビ實用上ノ指導其他種々ノ便益ヲウケル

第三條 本財團ノ會務ヲ處理スルタメ次ノ部ヲ設ケ本財團ノ役員ガ之ヲ分掌スル

- 一、庶務部 二、會計部 三、編輯部
- 四、教育部 五、國際部 六、地方部
- 七、企劃部 八、出版部 九、圖書部

第四條 本財團役員ハ役員會ニ常時出席シ又學會事務所デ會務ノ處理ニ携ルコトノデキル方ニオ願ヒスルコト

第五條 本財團維持員ハ維持員會ヲ組織スル維持員會ノ會則ハ別ニ定メル

第六條 本內規ノ變更ハ維持員會總會ノ決議ニヨル

財團法人日本エスペラント學會維持員會會則

第一條 本會ハ財團法人日本エスペラント學會維持員會ト稱スル

第二條 本會ハ財團法人日本エスペラント學會ノ維持員ヲ組織スル

第三條 本會ノ目的ハ次ノ通りデアル

- 一、維持員相互ノ親睦連絡ヲハカルコト
- 二、財團ノ事業ノ達成ニ必要ナ援助ヲスルコト

第四條 本會ハ事務所ヲ財團法人日本エスペラント學會事務所内ニ置キ、必要ニ應ジテ支部ヲ設ケルコトガ出來ル、支部ニ關スル規程ハ附則ニヨル

第五條 本會ノ役員ハ會長（財團ノ理事長）、幹事若干名（財團役員中ヨリ互選）、支部代表者カラ成ル

第六條 會長ニ事故ガアル時ハ幹事中ノ一名ガ其職務ヲ代理スル

第七條 本會ハ毎年日本エスペラント大會中總會ヲ開キ、但シ緊急ノ要ガアルト認メタ場合ニハ會長ハ隨時之ヲ招集スルコトガ出來ル

第八條 總會ハ其ノ出席者デ成立スル、但シ重要決議事項ニハ文書投票（總會席上テ開封ノコト）デ決議ニ參加スルコトガデキル

第九條 總會テ行フ事項概目ハ次ノ如クデアル

- 一、總會ノ議長ノ選舉
- 二、財團ノ前年度事業及ビ會計決算報告ノ聽取
- 三、財團ノ翌年度事業及ビ豫算編成上ノ希望ノ開陳
- 四、財團ノ目的事業ノ達成上必要ナ事項ノ審議
- 五、本會ノ前年度事業及ビ會計決算報告ノ聽取
- 六、財團內規及ビ本會會則ノ變更

第十條 總會ニ附議スベキ重要案件ハ少クモ二ケ月半以前財團機關誌上ニ發表セネバナラナイ

第十一條 本會ノ經費ハ財團ガ支出スル

附則 支部ニ關スル規定

第十二條 同一區域内ニ居住スル十名以上ノ維持員デ本會支部ヲ設置スルコトガデキル

第十三條 支部設置ハ本會會長ノ承認ヲ經ネバナラヌ

第十四條 支部ハ支部員ノ互選デ代表者ヲ選ビ本會會長ノ承認ヲ經ルコト

第十五條 支部ハ次ノ事業ヲ行フ

- 一、當該地域内ノ維持員相互ノ親睦ヲハカルコト
- 二、本部及ビ他ノ支部ト連絡相呼應シテ財團ノ目的事業ノ達成ヲハカルコト
- 三、當該地域中ニアル財團ト同一目的ヲ持ツ諸團體ト提携スルコト
- 四、其他支部ガ必要ト認メタ事項

第十六條 支部ハソノ宛名ノ變更其他重要ナ事項ヲ即時本會會ニ報告スルコト

第十七條 支部代表者ハ每曆年末ニ事業及ビ會計ノ報告ヲ本會會長ニ提出スルコト

第十八條 財團ノ維持員會費ヲ支部テ取りマトメテ財團ヘ送金スル場合ニハソノ一割ヲ支部經費ニ充テルコトガデキル

第十九條 支部經費ハ獨立會計トスル

第二十條 支部ハソノ機能ヲ失ツタ場合又ハエスペラント普及上妨害トナル様ナ言動ヲナシタ場合ニハ本會會長ガ支部ヲ取消スコトガアル

倫敦塔

夏目漱石原作

西博士エス譯

上製本(定價 30 錢 送料 2 錢)が 20 部程残つてゐます。至急御注文下さい。賣切の後には絶対にこの luksa eldono は再製いたしません。

面一新の エスペラント講習用書

改正定價 35 錢 送料 2 錢

前紙型がいたみましたので今回新に組みなほし本文 62 頁の外に後篇讀み物中の六ヶ敷語句に註釋を施したものを 5 頁附加し表紙は fleksebla な厚紙に變へ瀟洒たる體裁にて全く面目を一新した。

學會取次圖書 (前金注文に限る——
部數により割引せず)

SANKTA BIBLIO

書留 特價 3 圓

送料 18 錢

新舊約兩聖書を包含する小活字密組一千頁のものその大部分をなす舊約はすべて Zamenhof 博士の靈筆による名譯。何人も之を座右にそなへざるべからず。目下爲替相場下落せり。かゝる廉賣は當分得られざるべし。殘部十數部。至急御注文を

★Palaco de Dangero.

(定價 3 圓、送料 16 錢)

Mabel Magnalls の原著のエス譯でその内容のみならずその裝釘の優美なことは驚くばかりである。これは手練手管でかためたマダム・ボンパジュールの戀愛遊戲の渦の中に純眞な amo に殉ずる人々が翻弄されてかもされる愛戀愛慾の物語。

★Bennemann: Esperanto-Handwörterbuch の II Teil, Deutsch-Esperanto の部

(定價 4 圓) (3.5寸×5.5寸)
(送料 18 錢) (455頁クロス綴)

獨エス辭典として Christaller と共に最良の物。

★Rememoroj de Esperantisto (エス文) (定價 40 錢、送料 2 錢)

★ザメンホフ演說集(エス文) 0.80 4 錢

★我國に於ける 0.60 4 錢
★外國語問題とエス

★日本語エスペラント小辭典 (三 高) 1.00 4 錢

★新 魔 王 (エ ス 文) 0.30 2 錢

★心 の 片 隅 0.50 2 錢

★詩 集 花 束 0.80 4 錢

★カ ル ロ 0.20 2 錢

★日・エス 會話と辭書 (大道社版) 1.00 6 錢

★緑の星に憧れて (日本文) 1.20 8 錢

★夜の空の星の如く(日本文) 0.80 6 錢
(ザ博士演說集の和譯)

★悪 夢 (エ ス 文) 0.20 2 錢

★洗濯屋と詩人 (") 0.30 2 錢

★緑 の 朝 (") 0.30 2 錢

★范 の 犯 罪 (") 0.30 2 錢

★父 歸 る (") 0.30 2 錢

★初級エス作文教科書 0.30 2 錢

★模範エス會話 1.20 4 錢

東京市牛込區
新小川町 3 の 14

財團 日本エスペラント學會

振替口座
東京 11325 番

講習會の用書種々

★★★ 初等講習會には ★★★

エスペラント讀本

井上萬壽藏氏著・四六版 52 頁・挿畫數拾個入
定價 30 錢・送料 2 錢

外國語の素養の少ない人々をおしへるにはこの讀本が最も適當です。ことに挿畫を以て説明してあるので少年少女に教へることもできます。今度第三版發行と共にすつかり誤植を訂正致しました。御利用下さい。

ラヂオ・エスペラントテキスト

日本エス學會編纂・菊判 38 頁・印刷美麗
定價 20 錢・送料 2 錢

ラヂオ講座用として作られたものですが多數の人の熱望にそひ一般講習會の用書として發賣致します。第一課より第十課に互り文法を一通り配列し各課に練習題を入れた上第五課以下には一口噺・童話・手紙・寓話・詩・小説の拔萃よりなる讀み物を配置して興味の中に文法に習熟する様編纂してあります。

エスペラント講習用書

小坂狷二氏著・四六版 64 頁・改正定價 35 錢・送料 2 錢
中等學校卒業程度の人々に講習する際に本書を使用すれば最も短時日に最も高程度の學力を與へることができます。殊に本書は「エスペラント捷徑」と全く同一の材料を配置したもの故「捷徑」で勉強した人々の後習用書としても好適。改版により全く面目を一新し猶附録として讀み物の註解を數頁附加す。

★★★ 中等講習には ★★★

エスペラント中等讀本

小坂・大井・岡本三氏共著・新四六判 64 頁
定價 30 錢・送料 2 錢

興味本位の讀み物數十篇を易より難に分つて配列したもので中等講習用書として好適。御利用を。

同書正誤：—第 9 頁、—5 行 mia は sia の誤。第 38 頁、—7 行の al mi の次へ ŝajnas, ke malmultaj homoj ĉe la aliaj nacioj povis を脱落。第 41 頁、2 行 lia は sia の誤。同頁、4 行 en tagmezo の次へ montris al mi を脱落。以上の誤植は改版の際全部訂正します。悪しからず。

東京市牛込區新小川町 3 の 14 (振替口座東京 11325 番)

財団法人 日本エスペラント學會

日本エスペラント學會編纂

中西義雄氏點譯
上田順三氏印刷

四六倍大二百頁
厚紙印刷

定價一圓
送料十六錢

點字 書き エス ペラント 文法と小辭典

盲人エスペランチスト間に點譯のエス語獨習書兼小辭典として手頃で廉價なものが要求されてゐたが全く營利的にみてなりたないものでそのまゝになつてゐたが一昨年學會出版部と中西氏と交渉の上營利を度外視して之が作成頒布を企劃し學會編輯部にて編纂の上中西氏へ送り同氏は多忙の身にも拘らず常に佛教濟世軍の盲人部の指導にあたつてをられる經驗上本書の出現の必要を痛感され銳意その點譯に努力され上田順三氏亦この點譯によつて原版製作に従事され一年有半の勞苦の後去る四月上旬印刷出來しこゝに一般に發賣し得る運びに立ちいたしました。どうかお知り合ひの盲人の方々へエス語宣傳をなさると共に本書を御すゝめ下さい。

本書の文法の部は「新撰エス和辭典」の附録たる「エス語語法概觀」を以て之にあてたもの故エス語獨習書として役立つべく字書の部は同辭典中より日常必要な語彙數千語を擇び簡單な譯語を附したるもの故平易な讀み物の繙讀には極めて手頃な好伴侶である。

四月號廣告の取次圖書中 MARTA 及 FABELLOJ DE ANDERSEN (II-a Parto) は正切 SANKTA BIBLIO (價三圓 送料十八錢) はまだあります

發行所 東京市牛込區新小川町3ノ14 財團法 日本エスペラント學會
振替口座 東京 一一三二五番

告

小坂、土岐、大石氏歸朝歡迎會晚餐會の
寫眞あり。二枚一組20錢御入用の方は
日本エス學會へ申込の事。

第十六回日本エスペラント 大會紀念寫眞頒布

Osaka Esperanto-Societo 大會委員會次
の二種の寫眞を希望の方に頒ちます。

1. 大會會場屋上にて撮影の分(本誌五月
號掲載のもの)
2. 協議會場の光景

大サ——カビネ形

價——一枚に付金三十錢(送料共)

申込(送金)先:——大阪市北區東梅田町28

進藤商店 (振替口座大阪 4520 番)

第五回九州エスペラント 大會紀念徽章

エナメル仕上二色にて印刷の優美な in-
signo です。上記大會で参加者が佩用したも
の残品があります。紀念品として好適のもの
で未だ曾て我エス會でこんな insigno はこし
らへられた事のない珍しいものです。

價一個 30 錢 (送料共)

長崎市銀屋町 56

日本エスペラント學會長崎支部

(振替口座福岡 23194 番)

醫學エス界への福音!!

本會は醫學方面へのエス語の進出發展を
記念し益々その方面に於けるエス語運動の
發展助成のため

醫學エスペラント文集(定價50錢)

同文集註釋書(定價60錢)

の二書を定價半額の特價金 50 錢(二冊にて)
にて販賣する事に致しました。(この二書を
組んで賣ります別々では賣りません)。上記
醫學「エス文集」は醫學方面の文獻をあさつ
て材料を集めて書いたもので醫家エスペラ
ンチストの必ず一度は讀むべき書物です。同
註譯者は同文集の一言一句を丁寧に和釋し
註解を施したものです。大部數手許にありま
す。至急御注文を

發賣元 東京市本郷區

東京帝國大學醫學部解剖學教室內

エスクラビーダ・クルーボ

(振替口座東京 75525 番)

Internacia Medicina Revuo

隔月發行の醫學大雜誌(菊版數十頁アート紙
印刷寫眞入)。年額 2 圓 30 錢。

申込は上記 エスクラビーダ・クルーボへ

Leksikono de Kemio kaj Farmacio Her-
mesa Rondeto 編纂實費二冊一圓詳細は本誌
内地報導欄をみよ

◎國字問題解決の先驅◎

月刊
雜誌

ローマ字世界

定 一部二十錢
價 一年前金貳圓

◎日本の國字なるべき名譽と運命をもつた日本式綴方による

◎ローマ字の綴り方としての日本式ローマ字を應用し實際化したローマ

◎標準的綴方としての日本式ローマ字を應用し實際化したローマ

◎字の綴り方を御覽なさい!

◎ローマ字の日本式綴方の論據、要點等に就ては郵券二錢を御送

り下されば『ローマ字のすすめ』といふ小冊子を差上げます。

財團法人 日本ローマ字社

振替東京二一五〇四・電話小石川七〇一

秋田雨雀・小坂狷二共著

模範エスペラント獨習

改訂第十八版

ある西洋の教科書の焼きなほしではない。語系を異にす
る日本人の爲めに全く新しい様式で講義されたもので
得る知識にエスペラントに熟達した人も他書に見出し
書留送料十九錢」

ブリヴァ著・松崎克己譯

愛の人ザメンホフ

他の萬國語が盡く失敗せる中にエスペラントの優
幾多の隆盛あるは故ぞ。それは此の語が優秀であ
義に熱心な士が崇高なるエスペラント主義を人々
らで感動し、人々を主とする。努力し、努力し、人々
エスペラントを主とする。努力し、努力し、人々
料十三錢」

東京市本郷區牛込二丁目 文 閣 振替口座東京 九八八二四

エスペラント 捷徑

最新最良の獨習
書本一冊を讀
破すれば立派な
學力をえられる
定價 1.00
送料 6

エスペラント初等講座

外國語を全然知
らぬ人に一通り
文法を平易に説
明した良獨習書
0.20
2

新撰 エス 和 辭 典

語數一萬五千餘
譯語正確・索出
至便・新語豐富
0.75
2

エスペラント講習用書

文法教科書と讀
本とをかねたる
講習用の良書
0.35
2

エスペラント讀本

挿畫入初等用讀
本で程度低く小
中學生にも好適
0.30
2

エスペラント中等讀本

興味深き讀み物
數十篇を収む
0.30
2

エスペラント發音研究

エス語發音上の
疑問を氷解す
0.30
2

エスペラントやさしい讀み物

笑話22篇を對譯
詳註し興味横溢
0.10
2

マテオ・フアルコネ

(對譯詳註)
(叢書第一篇)

「カルメン」の作
者メリメの名篇
を對譯詳註す
0.35
2

骸骨の舞跳

(秋田雨雀氏戯曲)
(三篇のエス譯)

0.40
2

倫敦塔

(夏目漱石原作)
(エス譯)

0.15
2

無代進呈 { ★エスペラント宣傳の【葉】(講習會頒布用)
百枚以下無料(但送料卅枚毎に4錢)百枚以上百枚毎に實費送料共65錢にて
★エスペラント宣傳の【チラシビラ】(街上展覽會等で配布すべきもの)
三百枚以下無料(但送料百枚毎に2錢)三百枚以上は百枚毎實費送料共10錢

★日本風景風俗エハガキ (四枚一組三色刷價廿錢送料二錢)(エス文説明付)

★緑星章 { 甲種(安全ピン止) 乙種(背廣用) 各一個の價送料共三十錢
丙種(安全ピン止特製) 丁種(背廣用特製) 各一個五十錢送料六錢
カフスポタン 一揃 (箱入) 一圓二十錢送料六錢

★緑星旗 [紙製] (十枚送料共十五錢) 半紙大原紙兩面綠色刷左角四分の一は白地に緑の星、
残四分三は緑の地にエスペラントと白く抜きたるもの

我國におけるエスペラント普及・研究・實用の中心機關

財団法人 日本エスペラント學會

【東京市牛込區新小川町三の十四】 【振替口座東京 11325 番】

◆すべての運動は大眾の協力に俟たねばならぬ。今やエスペラント普及運動は最も多衆の協力を必要とする時代。各地同志の大同團結が必要だ。個々人の叫びは個々人の叫びにすぎない。大眾の叫びは輿論の喚起だ。組織だつた協力こそ眞の力だ。

◆エスペラントを愛するものは誰しも御入會下さい。（會員は法規上維持員とよぶ）

目 的	エスペラントの普及・研究・實用	
	(a) エスペラントに關する各種の研究調査及其發表	
事 業	(b) 雜誌及圖書の刊行等	
	(c) 講演會、講習會の開催及後援	
會 費	(d) 其他本會の目的を達成するに必要な認むる事業	
	(a) 普通維持員 年額 2 圓 40 錢	(b) 正維持員 年額 3 圓
入會手續	(c) 賛助維持員 年額 5 圓	(d) 特別維持員 年額 10 圓以上
	(e) 終身維持員 一時金 100 圓	
會 員 の 典	住所、職業、姓名(振カナ付)を明記し會費一年分を支拂へばよい。	
	(振替送金最も安全)	
會 員 の 典	1. 毎月研究雜誌“La Revuo Orienta”の配布をうく	
	2. 出版圖書の割引をうくることあり	
會 員 の 典	3. 語學上の質疑其他一般の問合の返事をうく	
	4. 宣傳の「榮」その他宣傳材料を無料でうくることを得	

詳しいことは直接御問合せ下さい

役員名簿 (五十音順)

理事長	理 學 博 士	中村 精 男	理 事	美野田 琢磨
理事		上野 孝 男		望月 周三郎
同 理	元鐵道省運輸局長	種田 虎 雄	慶大教授醫學博士	柳 田 國 男
同 理	東京女子大學教授	河崎 なつ	東京朝日新聞顧問	小坂 狷 二
同 理	中央大學教授	川原次吉郎	鐵道省技師	大井 學
同 理		何 盛 三		三石 五 六
同 理	帝大教授文學博士	黑板 勝 美	事 高層氣象臺長	大石和三郎
同 理	政治教育會長	小林鐵太郎	神奈川縣立農業學校長	清水勝雄
同 理	政修大學教授	高楠順次郎		木崎 宏
同 理	帝大名譽教授	土岐 善 磨	顧問 帝大教 授 男	穂積 重 遠
同 理	文 學 博 士	西 成 甫	顧問 帝法學博士	三島 章 道
同 理	東京朝日調査部長			
同 理	帝大教授醫學博士			

本誌購読料		本會振替		廣 告 料					發行所		印刷所		印刷人		編輯人		發行所	
一部	20	學會々員には無代	口座番號	1回	3回	6回	12回	◆金銭に關係なき廣告四割引	東京市牛込區新小川町三ノ十四	電話九段(三三)二四一八番	株式會社一匡印刷所	東京市神田區西小川町二ノ五	高 見 澤 保 芳	東京市神田區西小川町二ノ五	大 井 學	昭和三年六月一日發行	東京市牛込區新小川町三ノ十四	電話九段(三三)二四一八番
半年分	120		會計用(東京一二三三番)	全頁	25	72	140	◆表紙第三頁は二割増の事								昭和三年五月十五日印刷		
一年分	240			半頁	13	37	74	◆表紙第二頁第四頁はお断り										
				四半頁	7	19	38	◆特別會員の廣告は二割引										

定價貳拾錢 (送料二錢)